狂言

昭和38年1月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5ノ2
井上重氏御方　電㊥1430
名古屋狂言共同社
印刷所
株式会社　地上社　電㊥1190

新春挨拶

昭和三十八年卯年の新年を迎えまして御同好の皆様方の御健康を祝し御万福を御祈り申上げます。

和泉会も第三年を迎えました。考えれば三十六年徳川義親氏を会長として諸名士の賛助を得て狂言和泉流の宗家和泉保之氏の後援と名古屋に由緒ある狂言の育成を計る目的で結成されまして以来皆様の御協力と御援助によつて予期以上の成果を収めてまいりました。保之氏の小舞教室も追々と成果が上りつつありますが新年を期して新会員の募集を致します。狂言小謡と狂言小舞を家元自身手をとつて指導されます。御申込の方は共同社同人まで。

謹賀新年
昭和三十八年元旦
名古屋　共同社
和泉　会

一月の催能

一月六日　能と狂言の会　午前九時

狂　三人片輪　丹羽　久辰　船橋　紀寿
中野　釣　加藤　光彦
狂　不須　野村　麗子　小栗　洋子
伊藤すみ代
狂　不見不聞　佐竹　鈔介　鬼頭　秀治
鈴木　章
能　舟弁慶　米田　陽子　高安　守彦
長谷川淳子
押村美津子　立石　澄雄
問　金田　正孝

鑑賞の部

狂　重喜　佐藤　秀雄　河村　丘造
能　鉢木　内藤　泰二　高安　滋郎
問　佐藤卯三郎　井上　祐一

一月十三日　春星会　正午始

能　声　刈　金剛　巌　西村　弘敬
問　井上松次郎
能　舟弁慶　片岡　道子　高安　滋郎
問　佐藤卯三郎
狂　餅酒　河村　丘造　井上礼之助
佐藤　秀雄

一月十五日　大槻師追善能　十時半始

能　仲光　観世梅若　高安　滋郎
問　佐藤卯三郎
能　羽衣　観世　元正　高安　滋郎
能　砧　観世　武雄　西村　弘敬
大槻　秀夫
問　井上松次郎
半能　石橋　大槻　文蔵　西村　欽也
観世　喜之
狂　六地蔵　野村又三郎　井上松次郎
河村　丘造
井上　祐一

一月廿日　宝生会　一時始

能　嵐山　畑　富次　西村　欽也
倉本　雅
問　井上松次郎
能　七騎落　宝生　九郎　高安　滋郎
問　佐藤　秀雄
狂　末広　河村　丘造　佐藤卯三郎
井上礼之助

一月廿七日　清風社　囃子会

狂言解説

重喜＝法事に出かけようとした住持何時も頭をそらせる門前のかいあみの居ぬのに弱つている処へ新発智重喜、私そりましよう。刷刀を手合はせしつゝ師匠につまづく、そゝつかしさに住持、弟子七尺を去つて師の陰を踏まずと言う格言を教えて以後たしなめと言う、「師の陰をふまずに頭をそるには」師匠の言葉にしたがつて重喜の発明した珍案は？

餅酒＝加賀と越後の百姓毎年の年具を納めに京へ上る内、木の芽峠の大雪にさゝえられて途中で行合い両人揃つて納める事となり、首尾上々とお下りを頂き和歌をあげて下向するお正月らしいおゝらかな狂言です。

六地蔵＝仕合せをしそこなつたいたづら者、田舎人をだまして仏師になりすまして六地蔵を売る事にする。仲間二人と共謀して六体の地蔵に化けて二ケ所に並ぶ事にするが、御印象を直すとてさあコンガラカツテ、ついに失敗する。

末広＝目出度い脇狂言、末広がりを買いに出た太郎冠者、知らぬが仏、だまされて傘を売りつけられて、さて御主のきげんをとりもどす囃子物は。

狂言春秋

野村広二

新年おめでとうございます。今年もさちおおい年でありますよう、まづお祈りしたいとおもいます。

さて、新年の酒を口にして、佳春を祝う前に、昨年の能楽の世界をふりかえつてみましよう。狂言では、井上祐一青年の進歩がめざましかつたようです。一月の「田村」の間狂言から、面箱の役、そして三番叟の大役を仕とげたこの青年に、大きな期待と希望をよせたいとおもいます。大名もいいし、太郎冠者にもいいだろう。あのやわらかさはのびのびとした芸をもる器には、いつまでも失いたくない大事なものでしよう。次は佐藤秀雄。和泉会の「犬山伏」の犬の演技は圧巻で、物真似とはなにか、にせるとはどういうことか、なりきるとは、その正法の一端を掴みとつたすがたともいえましよう

今年はそのやや固くおもそうな語りと動きにやわらかい祐一の組合せが、丘遺、卯三郎、松次郎のほかに、名古屋狂言の世界を一層広くしてくれることと楽しみであります。先輩たちの間では、「泣尼」（丘遺、卯三郎）と「蟹山伏」「茸（くさびら）替ノ型」（松次郎）が逸品。前者の僧りよの生活描写は一特色、松次郎の山伏のかるい味もたしかに売り物になろう。筆頭歌村彦四郎も「弥宜山伏」の大黒と「鷺」などに出演、元気なところをみせ、そのうわさをきいた茂山弥五郎翁も大いによろこんでおられたようです。ほかには、にぎやかな「猿聟」と重厚そのものの「木六駄」（万蔵、万之亟）モダーンな「茶子味梅」（保之、松次郎）おちついた「月見座頭」（弥五郎、弥太郎）に新作の「とりかえばや」（七五三、千之亟、真吾）。案外印象のうすかつたのは「武悪」（三宅藤九郎保之、松次郎）。保之は小舞「鮒」と「鉄輪」が出色、万之亟の「蟬」も佳作でした。能の方では、「遊行柳」（六郎）「芭蕉」（鉄之亟）「巴」（本田秀男）「泰山府君」「雪」（巌）「通盛」（久馬、久共）「唐船」（博之）「卒都婆小町」（猶義）「加茂」（金春欣三）がよい能でした。喜之は「通小町」、竹生島、野宮」の三番の活躍と「鷺」にその健在を示しましたが、なかでも「通小町」の後半、とくに「野宮」の前半は芸の年輪をみせるすばらしい出来でしたけれど、地謡のわるさが全体の効果をそいで、おしい能にしてしまいました。宝生英雄のことですが、「葵上、張良、国栖」のどれも、太い線でまたは春霞ただようように演じ、後になつて次第にその味が出てくるのには、何といつてよいのであろう。今年の楽しみのこれまた一つです。名古屋では内藤泰二のたい頭がいちじるしいとおもいました。（みられなかつた能に木原康次の「弱法師」喜多実の「鉢木」と六郎、博之の「蟬丸」山本勝一の「道成寺」がありました）。これがいろいろの会から拾つた記録です。そして昨年のテレビとテレビにも記録にのこる曲やドラマが相当ありましたし、テレビ（NHK）の「道成寺」ははじめてのはづです。能面見学会、能面写真展、装束展が、東海北陸各所でおこなわれたことも記録すべきでありましよう。紹介もれの本では、田辺爵氏の「徒然草諸注集成」の中の兼好と世阿弥のつながり、年末には「能と能面」（中村保雄、葛西宗誠、前西芳雄共著）が出ました。ぜひ一読一覧をおすすめしたい。話かわつて、林愿蔵、佐野吉之助、大槻十三、金春八条の諸氏がなくなられたのは能界をさみしくしましたが、それにひきかえ、宝生九郎氏につづいて橋岡久太郎氏の日本芸術院入りの発表は楽しい知せでした。他方、新作や稀曲の発表も六一年同様活発でした。

今年は世阿弥が生れて満六百年に当る由　記念すべき年を迎えて、いろいろの行事がおこなわれることでしよう。すでに去年名古屋でも徳川美術館が春の能、狂言展覧会にその生誕六百年記念の意義をこめて開きましたし、東京でも京都でも種々おこなわれて、来るべき「六百年」のおとづれを空高くひびかせていきました。世阿弥については、貴重本の再版、研究成果の新発表がつづいて、世阿弥ライブラリーはいよいよ豊かになつてまいりました。しかしまだまだ研究完成の行手は遠いとおもいます。ここで一度全体から世阿弥をながめ直すのによい機会ではないかとおもいます。教えを乞いたいことばかりです。これは狂言の再認識という一大事にもつながるでしよう。とにかく能の心、狂言の心を探ることです。六三年を楽しく意義のある年にいたしたいものです。

研究

装束考について

（わらんべ草より）

新年に当つて種々と装束についての考察を参考までにわらんべ草より少し抜き出してみました。

二十六段

衣裳付の本ありといえど取合せ肝要なり夫々似合いたるよう尤も然るべく、その内少し心持あり、とかく同色は悪しかるべし、ちがいたるよからん。又又ことにもより今様の取合いもあるべし昔の道具今はなきものあり、総じて衣裳の取合いは其者の芸のぶんざいほどならではならぬ、ゆ、年寄幼いものとしごろ相応あるべし、初心は式法を守るべし、とくたけてはかくをはなるる、はなれずしてはゆかしからず是初心にかわるべし、似合いたるとてむさき出立はよからず、結構なるかたはまさるべし。

世間、出世ともに格をこえて格に当るはあたらずということなし、格の中にして格をいでざるは或はあたり或はあたらず、折を知り時に随うて格をこえ物に係らずして物の心を得て振舞う是誠の達人なりと云。

生れつきの美人も粧によりて美しき事を増す。悪女たりと云うとも美しく化粧せばそのまゝの如くにはあるまじしからば衣裳の取合もかくの如くなるべし。上手のよき衣裳を着、よく取合着たらばいよいよかるべし。下手にてもよき衣裳を着ば、悪しき衣裳にはまさるべし。（中略）

似合いたるとてむさき出立はよからずと云事七太夫の好にて書入る。似合たるとて賤しき者の如く似せて着るならば物によりてむさかるべし。是尤な事なり。

世俗に人形も衣裳と云へり。

四季時代所によりよく考べし、たとへは夏の事を冬するならば衣裳薄く着るべし。冬の事夏するにも衿を多く着るべし。所によるとは亭主、客人の御紋の物を着るべからず、余は之に準ずべし。

此如く心を万事に付くべし。

とあり似合いたる云々は「風姿花伝」

第二物学条々に

「田夫野人の事にいたりてはさのみこまごま賤しげなるわざをば似すべからず仮令、木樵草刈炭焼汐汲などの風情にもなるべき態をばこまかにも似すべきか、それよりなほ賤しからん下職をばさのみには似すまじきなり、これ上つ方の御目に見ゆべからず、もし見えなば余りに賤しくて面白き所あるべからず、このあてがいをよく〳〵心得べく似する事の人態によりて浅深あるべきなり」とあり之をとりあげたものであろう。

二十五段

狂言の道具我身を曲尺にして寸尺定まる武具に同じと云へど少しのかわりあり云々とあつて

槍、長刀、鉾の類は我が身の耳丈けに柄を切るべし、軍法には柄の長さ長刀は背丈けといえど少し短かき方を用ゆべし、其内槍、鉾等は柄の長さ背丈けよかるべし、鬼の杖は少し太き竹を用い幽霊盲目の杖は細き竹を用ゆべし余は是に準ずべし、仕舞杖は我乳丈けなり、柄振の長さも乳丈なり、鞭は十二束伏せ、尺は二尺八寸なり之、二十八宿を象どれり。打杖は腕丈、物狂の笹の丈は腕を伸べ、中指の丈に切るべし（狩場の払竹は腕を伸べ中の指の丈けに切るべし）又狩場の払竹は、我が背丈けなり、但し耳丈けにも切るべし、幽霊盲目の杖は乳丈けよりも少し長く肩丈けよかるべし、櫂櫨は我耳の下丈けなり。

朝比奈の棒は背丈に少し長く太きなり丸さ中指にて二ッ三ッ伏せ也。

何事も我身を規矩にして定むべし、我が背丈に高下ある故なり、惣じて棒長刀槍太刀にてしまい留めぬものなり。是習也此心得万事にわたるべし。

幽霊盲目畜類の杖は先へつき出すべし鬼の類力の強き類は腕をつきのべ棒のもとを前へつくべし。

とあつて小道具殊に杖等の使用法寸法は今と少しも変つておりません。

衣裳の色相の取り合せについても大体同色を嫌う点等現代に通じて行われていることである。

二月の予告

二月十日　梅猶会　十一時始

能　弱法師　梅若　盛義
　　問　井上　祐一
能　実盛　観世鉄之亜
　　問　佐藤　秀雄
能　舟弁慶　梅若　猶義
　　問　佐藤卯三郎
狂　節分　井上松次郎　井上礼之助

二月十七日　観世会

能　高砂　片山　博通
　　問　井上　祐一
能　羽衣　武田太加志
能　望月　観世　元正
　　問　井上松次郎
狂　夷大黒　佐藤卯三郎　井上礼之助　佐藤　友彦

二月廿四日　たたびき会

壬生狂言の題について

佐藤　秀雄

律宗別格本山宝幢三昧寺

これが節分に厄除詣として数万の人の参詣する壬生寺、春四月ガンデンデン無言狂言の壬生寺である。

この壬生狂言の題名について一応考えてみたい。

一、能楽から取材せるもの

土蜘蛛、大江山、橋弁慶、道成寺、紅葉狩、堀川御所（正尊）、夜討曽我、船弁慶、鵜、大仏供養、玉藻前（殺生石）、安達原、熊坂、羅生門

二、能狂言より取材せるもの

酒蔵金蔵（棒しばり）、炮烙割（鍋八撓）、花折、節分、花盗人（内容は太刀奪）

三、壬生狂言独特のもの

桶取、餓鬼責、愛宕詣、大黒狩、蟹殿山端とろろ、本能寺、餓鬼角力、大原女、湯立、棒振

能楽から取材したものは大方修羅物計りで太刀をぬき合つて切り合う物が多い。子供の見物にも人気があり、やる狂言師も楽にやつてゆけるのでよく出るらしい。それに本行式（壬生狂言の方では能の事を本行という）。大口をつけたり見た目の派出な為なのであろう。だが能を知つている人には食い足りない。壬生らしいものは世話物だがこれは女が出る。阿呆の供が出る。そして筋が軽いので、滑稽を通りこして悪ふざけをする事になり、上手な人であれば

賀正

ふごや
河文
電話代表㉓一三八一番

トヨダビル店
大名古屋ビル店

くりな
船津屋
電話桑名代表一八八〇番

面白味が大きくカバーするが、下手な事をやられては見ていられなくなる。結局むつかしいのは、この一番筋が簡単なこれら世話物といえる。

明治中期には、祢宜山伏、狐釣り（釣狐）があつたが之がなくなり、別掲の大黒狩、蟹殿、堀川御所、熊坂、大仏供養安達原、本能寺の七番はその後に加えられたものらしい。

その以前のものを見ると

猿舞、地獄破、性悪坊、妻盗人、だとか、朝比奈、餓鬼罪人、猿座頭、縄綯（花盗人）等の名前が出ていて、狂言から取捨されたことが判然としてくる。今日行われていないものに空也（閻魔堂では鬼の念仏というものに似ていて空也上人が悪人を念仏信者に教化さすといつたもの）猿廻し（これは猿舞の事か又は猿座頭のことらしい）男立（どういうものか不明）夜番（「時女」の事かと思う、美女を見染めた大尽はこの女を追い、女は夜番の衣物とかえて逃げる。大尽と供はこの女装の夜番をとらえ、あべこべに二人共衣物をとられて逃げ出す）、朝比奈地獄廻り（狂言の朝比奈）、盲人川渡り（狂言の井礒）狐釣り（狂言の釣狐）祢宜山伏等狂言にあるものが相当数あげられる。

いづれにしても三十番の内、二十八番までは一切無言。体と手と足をつかつて筋を運んで行くので、説明をきいてもハアと思う位で詳しくわかるのは狂言師仲間丈といえるだろう。然し大体の筋はわかるものである。例えばとにかく指先丈けで女をくどいてなびかそうとする処がある。無言の手まねだから聾唖者にわかるかと思うと、サッパリわからないと云う。壬生独特の手真似と云う事が出来るだろう。とにかく無形文化財として古い伝統をつづけている壬生狂言が今後も益々稽古を重ね古い型をこわさないように努力せられるようにと祈るものである。

（壬生狂言考より）

お披きのお知らせ　楽師協議会

梨本	秀治氏	初能披　竹内社中
岩附	善吉氏	囃子披　〃
峰沢	志づ氏	〃
杉本	みち氏	〃
岩田	幸子氏	〃
水野	糸子氏	〃
中西	正江氏	初能披　柴田社中
前田	祐子氏	翁　鼓披　田鍋社中
内藤	純子氏	〃
神戸	鋏二氏	能菊慈童披　殿島社中
小川	舛氏	鼓披　田村社中
柴田	蔦子氏	囃子披　吉田社中
平河	茲子氏	〃
田辺	典子氏	〃　辰己社中
日比野	貞子氏	〃　内藤社中
寺西	智恵子氏	囃子披　内藤社中
藤井	礼子氏	〃
川村	勝太郎氏	能舟弁慶大鼓　西尾社中
百々	貴美子氏	囃子シテ披　山田仁社中
竹岡	八雄氏	〃　大鼓　河村総社中
内藤	泰二氏	能乱披
杉浦	幸文氏	能田村披　河村鉦社中
芳川	芳正氏	〃
澄川	幸子氏	囃子披　〃

編集後記

金春流河村恒三氏が今度職分となられました。心からお喜び申上げると共に同氏の発展を祈り上げます。

年新賀謹

一謡会　河村鉦二
石井会　西尾孫太郎
藤門会　加藤良久
長生会　鬼頭八郎
竜吟会　藤田六郎兵衛
観衛会
霞会　田鍋惣太郎
潤水会　林甲子男
観水会　野崎太郎
観正会　久田秀雄
春星会　片岡道子
高安会　高安滋郎
たなびき会　田鍋惣一郎
名古屋能楽鑑賞会　田鍋惣太郎
名古屋能楽倶楽部　村真太郎

風韻会　殿島修二
幸友会　福井啓次郎
金剛流松風社　片野東四郎
掬水会　柴田初太郎
曲水会　増田一雄
金竜会　金森準三
金桜会　前田晶広
春鶯会　山田仁三郎
正楽会　加藤丈太郎
松謡会　佐藤太俊
清風社　大塚一二
掬水青陽会
能楽協会　名古屋支部　支部長　田鍋惣太郎
名古屋和泉会　会長　徳川義親
狂言共同社（イロハ順）

狂言

昭和38年2月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5ノ2
井上東兵衛方　電㊟1430
名古屋狂言共同社
印刷所
株式会社　地上社　電㊟1196

狂言人語

歌村彦四郎

波襲来、何年振りかの寒波の襲来で久寒しく雪を見なかつた名古屋の街も家の陰等日陰の辺りは終日雪の残る今日此頃となりました。お正月以来演能を重ね、二月を迎えてほつと一息という処です。

能楽協会名古屋支部も役員改選を迎え田鍋支部長以下御留任となつて増々芸道推進に尽力頂ける事となり此様な喜ばしい事はありません。

支部長は先般池田総理官邸の芸能人招待会へ御出席なされました。御感想を頂いて掲載致しましたが中々大変な人だつた様です。種々と意見も述べられております。しかし文化の貢献に一役を荷つた会合であつた事は事実でしよう。

四月から和泉流野村万蔵氏が渡米される由、日本文化の海外宣伝に貢献される同氏の健闘を祈るものであります。

二月の催能

二月三日　東海宝生流の集い　十時始
能　胡蝶　田辺典子　西村欽也
間　丹羽鉞治

狂　文荷　橋本和哥子　佐土根康子
服部恭子
能　二月十日　梅猶会　十一時始
弱法師　梅若盛義　西村欽也
井上祐一
能　実盛　観世鉄之丞　西村弘敬
佐藤秀雄
能　舟弁慶　梅若猶義　高安滋郎
佐藤卯三郎
狂　節分　井上松次郎　井上礼之助
二月十七日　観世会　正午始
能　高砂　片山博通　西村欽也
井上祐一
能　羽衣　武田太加志　西村弘敬
能　望月　観世元正　高安滋郎
井上松次郎
狂　夷大黒　佐藤卯三郎　佐藤友彦
二月二十四日　たなびき会
井上礼之助

狂言の解説

文荷＝小人狂の主に恋文の使に出された太郎冠者と次郎冠者は文の重さにふと出来心で開けてみるとコイシやコイシやと小石沢山な文にびつくり、さてこのおさまりは。

節分＝遂来の嶋から日本へ渡つた鬼が美しい女房の宅へ訪れる。女の美しさに心を奪はれ、思ひのたけを打開ける。やつと色よい返事をうけて宝の笠、かくれみの等の宝をとり上げられた鬼が、やれ〳〵と思つたとたん、節分の豆蒔を初められてホウホウの躰で逃げ出す。

夷大黒＝交野の郡に住む有徳人、日頃信仰する大黒天を詣るに大黒天は夷と語らつて出現、夷と共に由来を語り、多くの宝を与えた上この処の福天とならんとあつて有徳人宅へおさまる。

総理大臣池田勇人氏招待会に参りまして

田鍋惣太郎

去る一月十一日総理池田氏個人名前にて宛名も個人宛「日頃芸術文化関係について御尽力の各位と共に新年を寿ぎ国民文化の向上について御懇談申あげたく」（総理官邸にて）招待状旧冬十二月三十日（名前記入章付）受信に付私も悦んで参りました。

当日は各芸術文化関係代表の方々約八百名程参集（カクテルパーティ）

首相の御挨拶には第一に本日は政談に関係なく国家平和を納めるには、芸術文化が第一、昨秋欧州旅行の時も、其国の芸術、文化、音楽を第一に鑑賞して、其後も政談致し、フランス、イタリー其他の国でも皆スムーズに談合出来て大変効果がありましたにつき、今後世界平和にも第一に芸術文化の必要を痛感致しました。此際是非共来会の皆様に国家平和のために御協力を御願いするとの御言葉で参会者一同も悦んで御受申ました次第です。能楽の連中皆丁度首相壇上のすぐ前にてよく承りました。其次ぎ、美術関係（絵画、彫刻、其他）文芸（創作、評論其他）芸能（音楽、舞踊、映画、演劇、其他）文化（各種文化団体）以上代表者の挨拶あり、最後に能楽代表、宝生九郎氏発声一同首相萬歳を三唱して終了、其後各々歓談、私其席上にて他の芸能の方々と歓談各芸能者は今後国内の方だけでなく海外の方々に、芸の真ずいを理解鑑賞して貰う様に一段の研究が必要と申しました処皆さんも同感で一層勉強致しましようと愉快に談合申しました。大変なごやかな会合で御座いました。

狂言往来

野村広二

正月にみた狂言で感銘をうけたのは二日の「三番叟」（山本東次郎、NHKテレビ）。名古屋では「六地蔵」のかるい味がおもしろく、能は、四回の演能に直面物が一番づつあつたのが珍しいことでした。次は狂言界の朗報二つ。野村万蔵氏の芸術祭の受賞のこと、東映ニュースに狂言師として登場、一筋に芸道を生さぬく強い姿が紹介されたこと。今一つは昨年の大阪の試みをうけて、東京の労音が「狂言鑑賞会」を盛大に開催し、狂言が若い人の間にすなおにうけいれられたという話で、六三年の狂言にさいさきよいたよりといえよう。「世阿弥」については、「国文学」と「文学」が一月号を特集でだし、世阿弥の真価を世に問う

たが、久松潜一博士と中村保雄氏の論文は興味つきないその一端です。「名古屋学生能と狂言の会」も、各大学グループがおこなつた風姿花伝（花伝書）の研究発表をし、能精神の核心を身証しようとしている。演能では、二月の大阪の産経能、三月の中日五流能が世阿弥能を開催する由。わたくしも、いつまでもわからない二、三の問題、幽玄（世阿弥の初期と後期の展開、松風・井筒・老女物論）、世阿弥の曲がどのようにして他流にとりいれられたか（作者別と舞、神男女狂鬼による能組の関連）、狂言とのつながり（目前心後と狂言「わらんべ草」の残心の習）など、おしやべりしたいとおもいます。

三月の予告

三月三日　九皐会
能　八島　梶田　俊
　　今枝　良治
能　葵上　柴村　栄枝
　　河村　丘造
狂　舟ふな　井上松次郎　井上礼之助
三月十日　青陽会
能　小袖曽我　塚本　秀雄
　　河村　丘造
能　藤　柴田初太郎
　　佐藤　秀雄
能　車　加藤丈太郎
　　佐藤卯三郎
狂　二人大名　佐藤友彦
　　井上　義次　井上松次郎
三月十七日　名匠鑑賞能
能　小袖曽我、辰己孝　野口　緑久
能　熊野　宝生　英雄
能　綾ノ鼓　宝生　九郎
狂　素袍落　野村又三郎
三月二十一日　林愚蔵追善能　井上松次郎　佐藤卯三郎
能　景清　武田太加志　十時始
能　砧　観世　元正　高安　滋郎
　　井上松次郎　西村　弘敬
能　舟弁慶　観世　元昭　高安　滋郎
　　井上礼之助
狂　宗八　佐藤卯三郎　河村　丘造
　　佐藤　秀雄
三月二十四日　竜吟会
能　翁　佐藤　太俊　三番叟　井上祐一
　　面箱　井上義次
能　鶴亀　佐藤　太俊
　　佐藤　秀雄
能　小袖曽我　木下弥兵衛
　　佐藤　友彦
能　千手　伊藤　長八
能　蟬丸　小瀬　静夫
　　河村　丘造
半　融　水藤　又吉
　　佐藤卯三郎
　　井上松次郎
狂　三人長者　井上礼之助

研究

「狂言装束考」続

佐藤秀雄　調

昨年以来続けて参りました狂言装束考も新年度に当り特に珍らしい参考になりそうな物を抜き出して考察を重ねたいと思います。歌仙等は四拍子入りの狂言で装束其他も、人丸を初め如何にも歌人らしき出立ちであります。舞台一杯に並んだ六歌仙の朗かな姿態は想像する丈けでも面白いではありませんか。

＝歌仙＝

シテ　白垂、白髭、白鉢巻、金風折
（人ト　小格子、厚板袴、狩衣、白地、浅黄地に限る、口伝、指貫、込大口、腰帯、金中啓
（僧正）金角帽子沙門を取、小格子、厚板
（前）紫水衣、掛絡、指貫、コミナシモ吉、腰帯、黒珠数、僧扇子、右
（僧正）葛帯ニテ衣の袖ヲ玉タスキヲ
（後）上ル、扇指、鎗ヲ右ニカタゲル
（業平）冠ヱを巻いてオイ掛ル、厚板一重狩衣、腰帯、下袴、中啓ヲ指、弓矢を持つ、箙ナシ
（小町）葛奉書の元結掛、葛帯、乙面
（前）唐織、舞衣カ長絹カ、緋大口腰帯、黒骨舞扇子
（小町）葛帯ニテ舞衣ノ袖ヲ玉タスキヲ上ル
（後）長刀ヲ右ニカタゲル
（猿丸）梨子打前へ折、厚板、紺袷狩衣、大口、腰帯、中啓持
（元輔）梨子打、調子掛ニテモ、厚板寄狩衣、腰帯、白大口、中啓持
（絵馬打）掛素袍、腰帯、小刀、括袴扇、絵馬ハナシ
入用物　葛帯六、短尺、奉書ヲ切葛桶ノ蓋ニ入レル七枚、葛桶
作り物　弓矢、鎗、長刀、杖竹、三本

お披きのお知らせ　楽師協議会

堀田美也子氏　囃子　披　増田社中
矢橋　浩吉氏　初　謡　披　〃
塚田　幸子氏　〃　〃　〃
浅野　常蔵氏　囃子　披　〃

石田特許事務所

弁理士
法学士　石田一

名古屋市昭和区都島町2の10　TEL (88) 1330

狂言

昭和38年3月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5ノ2
井上重兵衛方　電㊀1430
名古屋狂言共同社
印刷所
株式会社　地上社　電㊀1196

狂言人語

歌村彦四郎

陽春三月の声を聞けば早　桃もほころび猫柳の白く芽を吹く河畔にはちらほら小魚の銀鱗が光ると云う気節です。演能も愈々盛になり何かと多忙になる此頃です。

比較的演能の少なかつた二月を送つて今月は又演能が重なつております、殊に二十二日には故林愿蔵氏の一周忌追善能があり多彩だつた氏の生前を偲んで優雅な演能が行われることと存じます。

去る二月十八日市立工芸高校の予餞会が市公会堂で催され狂言「しびり」「盆山」が、三年生の男子で演ぜられました。非常に真面目に研究し、素直に演ぜられた此二番の狂言は、大変全校生徒に歓迎せられ有意義な催だつたとしみじみ感じさせられました。

又、三月一日には、八事明徳少女苑で「しびり」が演ぜられ、之又多大の感銘を与えました。追々にこうした催が開かれて狂言自体が若い人々に共感を持つて支持されて来ることは私共にとつて望外の喜びです。今後共ぜひぜひこうした機会を得たいものです。

和泉保之氏の来名稽古も追々順調に発展しております絶大の御援助を祈るものであります。

三月の催能

三月三日　九皐会　午前十時始

能　屋島　梶田　俊　西村　弘敬
間　今枝　良治
能　葵上　芝村　栄枝　高安　滋郎
間　河村　丘造
狂　舟ふな　井上松次郎　井上礼之助
三月十日　青陽会　正午　始

能　小袖曽我　塚本　秀雄　久田　秀雄
間　佐藤　秀雄
能　藤　柴田初太郎　西村　欽也
間　井上礼之助
能　車　僧　加藤丈太郎　高安　滋郎
間　佐藤卯三郎
狂　二人大名　佐藤　友彦　井上　義次　井上松次郎
三月十七日　名匠鑑賞能　十二時半始

能　小袖曽我　野口　禄久　辰己　孝
能　熊野　宝生　英雄　西村　弘敬
能　綾鼓　宝生　九郎　西村　欽也
間　井上礼之助
狂　素袍落　野村又三郎　井上松次郎　佐藤卯三郎
三月廿一日　林愿蔵追善能　十時始

能　景清　武田　忠　高安　滋郎
能　砧　観世　元正　西村　弘敬
間　井上松次郎
能　舟弁慶　観世　元昭　高安　滋郎
間　井上礼之助
狂　宗八　佐藤卯三郎　河村　丘造　佐藤　秀雄
三月廿四日　竜吟会　午前九時

能　翁　佐藤太俊　千歳　久田　秀雄　三番叟　井上　祐一
面箱　井上　義次
能　鶴亀　佐藤　太俊　西村　弘敬
間　佐藤　秀雄
能　小袖曽我　木下弥兵衛
間　佐藤　友彦
能　千手　伊藤　長八　高安　滋郎
能　蝉丸　小瀬　静夫　高安　滋郎
間　河村　丘造
半　融　水藤　又吉　西村　欽也
佐藤卯三郎
狂　三人長者　井上松次郎
井上礼之助
三月三十一日　中日五流能　於文化講堂

狂言の解説

舟ふな＝遊山に出た主と太郎冠者の二人、川岸で舟を呼ぶとて、ふなやあいと呼ぶ太郎冠者に、舟ちやと云う主、さて両人言いつのつた上で、舟も云々舟人も云々の謡でケリがつく。

二人大名＝自身大力をもつた二人の大名、通行人に太刀をもたせんとおどしつすかしつして持たせたものの、太刀を持つた通行人に今度は散々になぶられて、あげくにはとりのけあいのまねやら、其上に起上り小法師のまねまでさせられる。

素袍落＝参宮へ叔父を誘いにやられた太郎冠者、一杯頂戴の上、代参の名目で素袍まで拝領して、千鳥足で帰宅する途中、主と出合う。意外な太郎冠者の酔態に腹を立てた主の目の前へ、もらつた素袍を落す。太郎冠者の酔態があざやかに描き出す、新春風景をとくと御覧下さい。

宗八＝俄坊主となつた料理人と還俗した斗りの坊主、それぞれ有徳人に雇われるが、お経の読めぬ料理人の坊主は仏前でマゴマゴ、魚をあてがわれた還俗坊主は勝手でマゴマゴ、やつと相談の上交替して留守中に仕事をしまおうと初めたものの、遂に化け切れず逃出す。

三人長者＝街道で出合つた三人の長者がそれぞれ自分を名乗り合つて三人相舞の上で故郷へ引上げると云、誠に目出度い狂言です。

三番叟について

既に皆様御存知の翁千歳三番叟の内の三番叟で素面で剱先烏帽子で舞ふ前段がもみの段、黒色尉の面をつけて鈴と扇を持つて舞ふが鈴の段です。新進気鋭の井上祐一が練磨の精随を発揮して目出度舞納めます。

御期待下さい。

アメリカ生れの狂言本

鈴木　馨

はつ能やまかり出たる果報者
花吹雪能始まつてゐて静

これは野村萬蔵師が去年名古屋来演の節、自著狂言の道、狂言面の扉に題せられた名吟である。その萬蔵師がアメリカへ進出されると聞き、評論家坂西志保女史が在米中に出版した英文「日本の民衆演劇」を紹介しよう。

能や狂言は欧米人には耳遠いものだが、早く名古屋にも宣教師として来住したノエル、ペリが能、狂言（十一番）をフランスに伝え、六高、学習院英語教師だつたサドラアは平家物語、方丈記などの外、能狂言歌舞伎の中に、花子、鈍太郎、通円など二十四篇を英訳した。だが外人の訳は、どこか狂言としての妙趣を欠いた、無味乾燥なものになり易い。

坂西女史は大正末年渡米。国会図書館勤務の余暇に訳した狂言、墨塗女、骨皮、仁王、猿座頭、瓜盗人、武悪など、読んで興味のあるもの二十二番を一冊にまとめたのが本書である。原文の味を伝えるよう、十分な用意の下に、訳筆をとられ、一面先代茂山千五郎父子の型を、野口よしえ画伯が彩管を揮つて興を添えている。初版はボストンで出版し、近年ユネスコの日本代表作選書として、東京のタットル社が飜刻した。B六判一六〇頁、しぶい装禎も狂言本らしい。（丸善販売）

外人のために、巻頭に狂言の源流、歴史、作者と台本、語材、狂言の美について、専門書を引用した二〇頁に及ぶ解説がある。洗練せられた英文で、狂言の妙味を異邦人に伝えている。その中の餌差十王はキーンの日本文学選に、狂言の代表作として、キーン訳の附子とともに収録せられている。なお学徒に有益なものは、附録の戦前欧米訳狂言目録で、五十八番がABC順に列記してある。若い人たちには、難解な古典語より、外国文で読む方が、理解が早いだろう。

野村師のアメリカでの御活躍を期待しつつ、若人の机上に、アメリカで出来た狂言本を飾るようお勧めする。

（三八、二、二〇）

狂言往来

野村広二

今年の能楽協会式能は、二月に三回目が催された。能五番、狂言四番。鶏聟（東次郎）、清水座頭（藤九郎）、名取川（弥太郎）、桶の酒（万蔵）。この狂言をみるだけでも楽しい催し。狂言は弥五郎翁についで、万蔵と東次郎の時代のきていることを舞台が告げる。そして二人とも敬服すべき人間修業のきびしさを感じさせます。「世阿弥」のことは、能楽思潮（二二・二三合併号）の、「世阿弥と現代の能」（香西精　おもしろく、なお同氏には名著「世阿弥新考」の並々ならぬ努力と成果に、大きな敬意がはらわれるべきです。「世阿弥私注―とろうきよう考」はとくに感銘もつて読ませていただいた。故平田禿木先生とおなじく、「能と日本の英学」に記念の一頁を飾られることでしよう。年末から読んだ文章のなかで、菅泰男教授の「シェイクスピア舞台復原研究者の犯してきた過去に現在を読みこむ誤り―自分の時代の習慣でエリザベス朝舞台を律する誤りをさけなければならない……」（英語青年）は、「世阿弥」のことにもあてはまることばであつた。さて、来年は、今年の「世阿弥」についで「オリンピック」の年。狂言や能の紹介に、もと檜書店がだしていた小冊子のようなものを、外人向に、だしてもらえたら、もうどこかで計画されていることであろう。

四月の予告

四月七日　掬水会
能　蝉　丸　植村真太郎　植村　稔
能　景　清　石田　糸代　中西　正江
狂言　未定

四月十四日　観衛会
四月廿一日　観世会
能　清　経　浦田　保嗣
能　杜　若　杉浦　義朗
能　鉄　輪　観世　寿夫
狂言　未定

四月廿八日　茲水会
能　清　経　中尾　寿満　鈴木　公子
能　羽　衣　野田伊久枝
能　花　月　森川みどり
間　佐藤　秀雄
狂　歌　争　井上　佐藤　友彦

四月廿九日　幸友会

各種新刊書籍・雑誌
各宗仏書とお経本
文光堂
老舗
信用第一
（古本最高価買入）
名古屋中区赤門通電停前
電話㉔　3410

昭和38年4月1日発行
発行所
名古屋市中区栄門前町5ノ2
井上瓢兵衛方　電㊟1430
名古屋狂言共同社
印刷所
株式会社　地上社　電㊟1196

狂言人語

歌村彦四郎

弥生三月、桃の節句をすぎて早卯月の声を聞きます。何十年振りかの異常寒波もやつと底をついて、梅は満開をすぎ桃も桜もチラホラ、ほころびかける今日此頃となりました。やつとおとづれた春、風も暖かい陽春の日ざしを浴びてそろそろ若芽も萠え出でる絶好のシーズンを迎えて演能も盛んとなります。今月は又掬水会、観衛会、観世会、茲水会と観世流の独演会の観を呈しております。三月三十一日には中日五流能があり、中々の盛会でありました。

六月二日には恒例の朝日狂言会を計画しております。今回は関西の雄、茂山忠一良及茂山倖一の両氏を懇請して悪太郎、入間川を上演して頂く予定です。詳細は追つて発表します。

上方狂言独得のおおらかさと洗練された型の美しさをしみじみお鑑賞頂けるものと自負しております。

野村万蔵氏父子の渡米が実現しました。アメリカで、日本の狂言を教え、実演をされる由、多大なる成果を期待してやみません。

二十六日新聞紙上に文部省芸術選奨受賞者として三宅藤九郎の名を見出しました。和泉会を中心に多くの曲を手がけ、稀曲の復活に情熱と演出力をかたむける氏の受賞は当然の事かもしれませんが狂言界もここまで来たのかと、ホツとすると共に喜びにたえません。謹んで誌上からお喜び申上げます。

野村又三郎氏の也留舞会も十八日に公演されます。よろしく御支援下さい。

和泉保之師の五月の稽古日は、十六日、十七日、十八日、十九日の四日間です。お誘い合せ御来場下さい。

四月の催能

四月七日　掬水会　午前九時半始

能　蝉丸　植村稔　植村真太郎　高安滋郎

間　佐藤卯三郎

能　景清　山本泉　中西正江　石田糸代　西村欽也

狂　寝音曲　井上松次郎　井上祐一

四月十八日　也留舞会　午後三時始

不見不聞　稲本　田沢義弘　野村又三郎

引橋　後藤正二　野村又三郎

盆山　小栗洋子　野村麗子

梟山伏　井口鴫留　山本光次郎　鬼頭秀治

武悪　野村又三郎　井上礼之助　稲本金一

祐善　野村又三郎　井上松次郎　井上良治

奈須与市之語　野村万之丞

縄綯　野村又三郎　井上松次郎　河村丘造

四月廿一日　観世会　正午始

能　清経　浦田保嗣　西村欽也

能　杜若　杉浦義朗　高安滋郎

能　鉄輪　観世寿夫　西村弘敬

間　井上松次郎

狂　見請殺嘩　佐藤秀雄　河村丘造　佐藤卯三郎

四月廿二日　宝生流研究会

狂言の解説

寝音曲＝夜太郎冠者の部屋から聞えた小謡の声に翌日太郎冠者を呼出して一曲謡えとしゆる主に一計を案した太郎冠者寝て居なければ謡えぬと主の膝枕で謡い出すが、頭を上げさせれば声が出なくなる、負けじと一考した主の計略にかかつて、取りちがえて起きたまま謡い出した太郎冠者、さてこのおさまりは。

身請咲嘩＝逢つた事もない頼うだ人の叔父を迎えに出された太郎冠者、まんまと欺されて叔父に化けた身請の殺嘩と云うスツパを連れて帰る。身請とは主の言葉を借りて云えば「世の盗人は人の目をしのうでとる、キヤツは見たものは請うてもとる、それ故身請という、咲嘩とは盗人の異名ぢや」さて此スツパを主は如何にさばくか？

歌争＝野遊びに出うと誘い合つた二人、歌の文句から互に言いつのり、はては河原の相撲の話に発展、ついには取組合いとまでなる、ふとした日常茶飯事的な言葉のもつれが、大変な事になつてしまう。

狂言往来

野村広二

三月は追善能の月。名古屋では林愿蔵氏の一周忌能。林氏のきれいな素謡がきけなくなつてもう一年たつ。このときの狂言「宗八」がどんな出来だか、みられなくて惜しい思いがした。京都では先代金剛巌十三回忌能。名古屋とは実に関係の深かつた先代巌氏が去つてはや十三年になる。東京では、桜間弓川七回忌能。故弓川氏も名古屋の舞台ではなくてはならない人であつたし、巌の「老女」と弓川の彫りの深い、折目正しくしかも美しい能がみられないのは、いつまでたつても寂しいことである。京都で、そのとき、弥五郎翁が演じた「左近三郎」は大層な出来で味わいのこい小品であつた。また片山博通氏の急逝。終戦の年、十一月、いちはやく名古屋能楽人がその復興を目ざして催した大衆能に、シテを

つとめて「羽衣」「猩々」をまい、故千作翁とともに名古屋能楽界に協力して、今日のさかんな姿をみるいしづえをきづいた人である。まだ商工会議所で能がおこなわれていたときにまつた「葵上」は知性派博通のよさをいつまでも物語ることであろう。なお笛方の藤田流が先代清兵ヱ三七回忌能を今月と五月に営むに当り、三月の第一部に、その芸嗣として発表された昭彦君が一管「獅子」をつとめた。これが今月第一の楽しい話題、金剛永謹（ひさのり）君と組んで演ずる五月の「鷺」は春の話題をさらうにちがいない。

さて「世阿弥」記念の中日五流能は新様式とのうわさをきいたが、大いに期待をかけたい。

舞台で能衣装を着せる会

四月二十二日（月）午後五時始めの宝生会夜能で、観能講座の一つとして、能装束の着付けを公開する由。熱心家には見のがせない催しである。

同夜は、右近の能があるので、その紛装を舞台で紹介しながら順に着付けし、女性の装束一般に及ぶ解説が、辰巳孝師によつてなされる。

また、小鼓芸話を田鍋惣太郎師より聞いたり、狂言小舞を組み入れたり、休憩室には、女面の写真展が用意されたり、なかなか意欲的な企画で、宝生会の若い生命力が感じられる。

（宝生流内藤泰二）

五月の予告

五月三日　観正会

能　翁　久田秀雄　面箱　佐藤友彦
　　三番叟　佐藤秀雄
　　千歳　佐藤太俊

能　鶴亀　竹内鍵二
　　間　今枝良治

狂　柑子　佐藤卯三郎　井上松次郎

五月十二日　正楽会

能　小袖曽我　浅野恭子　郡幸江
　　百寿　三村恵子
　　間　茹屋　稔
　　野村又三郎

能　鞍馬天狗　山森幸男
　　間　佐藤卯三郎　今枝良治

狂　盆山　井上祐一　佐藤友彦

五月十九日　藤田清兵衛三十七回忌追善
　　藤田昭彦後嗣披露

能　蟬丸　観世喜之
　　観世元正　西村欽也
　　間　佐藤卯三郎

能　鷺　金剛永謹　西村弘敬
　　間　井上祐一

能　舟弁慶　宝生九郎　高安滋郎
　　間　和泉保之

狂　祐善　井上松次郎　河村丘造
　　佐藤秀雄

五月廿六日　鳳鳴会

能　忠度　佐治邯山
　　間　井上礼之助

能　安宅　山本一
　　間　井上松次郎　佐藤卯三郎

狂　井礎　佐藤秀雄　山本光次郎
　　佐藤友彦

身請殺嘩についての考察

佐藤秀雄

和泉流では「身請殺嘩」又は「咲嘩」という此狂言は大蔵流では「察化」と云う。身請は身乞ともかきその説明を主が太郎冠者に云う、さつかとは盗人の異ゞ　ある。大蔵流では身乞の察化とあり別に説明はないが、大蔵虎光著の狂言不審議には身乞とはなく似鯉とあり、似鯉についての文献を書き記して、

『按に此狂言のにこひのさつくわと言は紛敷者故にこひと言し事にや、さつくわと言も、其時の式に応じいろいろの者に成て人をたらす成べし、惣て田舎の者はかならず国弁有物也、夫を程能察して化すの義にて此狂言の名目に附しや、今云かたり杯の類か、右を古言に似鯉と云か、田舎者に程能察して化すなれば似声か……』

とある。

こうして見るとどちらにしても、ゆすり、かたりのすつぱに違いはないが、此狂言自体からその性格を見ても中々機に応じての転身の妙と云うか、仲々たいしたもので、ばれかけての態度と云い、叔父に化けそこなつての主との応待と云い、又少々抜けた太郎冠者への応接と云い、抜け目のない所は、あり来たりの小悪人でない。さすが名を得し、みごいの殺嘩である。しかしこの堂々たるかたり氏が少々抜けた太郎冠者の天真爛漫さ、明け放しの野放図さと主のそれを上手に利用した共同作戦にまんまと引かゝつて、看板程もなく、こづき回されるのだ。使われるもの、誰にでも人なつこく内明ける小心さを表には出ずに上手にかげであやつろうとする主の腹芸にまんまと引かけられるかたり氏は、矢張り此狂言では、あくまでも、ア　てあるのだ。

一点にても卸します

営業品目

ダイヤ・貴金属
ヒスイ・メキシコオパール
真珠・装身具全般

石原商会

昭和区川名本町6ノ39（石原総一朗）
電㊺4735・3921
連絡先　河村丘造

狂言

昭和38年5月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5ノ2
井上重兵衛方　電㉙1430
名古屋狂言共同社
印刷所
株式会社　地上社　電㉔1196

六月二日　朝日狂言会　午后一時始

入間川　茂山倖一　茂山孝夫　茂山忠一良
因幡堂　河村丘造　野村又三郎
素一雅子　神舞　野崎太一　寛鉱一　田鍋惣太郎　藤田六郎兵衛
馬口労　井上松次郎　佐藤秀雄　地謡　井上祐一　和泉保之　佐藤友彦
悪太郎　茂山忠一良　茂山孝夫　茂山倖一
忍ぶ其夜　石田喜樹
若松　井上義次
小舞　水車　野村又三郎
鵜飼　和泉保之
二人袴　井上祐一　井上礼之助　佐藤卯三郎　佐藤友彦

会員申込所　朝日新聞名古屋本社企画部㉓八一三一
中区裏門前町井上方共同社㉜一四三〇
各プレイガイド

狂言人語

共同社同人

恒例の朝日狂言会は別掲の曲目をそろえて六月二日開催されます。茂山氏による関西狂言の粋は必らず御期待に副えることゝ張切つております。

田鍋支部長から玉稿を頂きました誠にお目出度い親子三代の翁公演、前代未聞と云つてもいゝと思います心からお喜び申上げて益々の御精進を祈ります。

五月の催能

五月三日　観正会　午前九時始
能　翁　久田秀雄　三番叟　面箱　佐藤友彦　千蔵　佐藤秀雄　佐藤太俊
能　鶴亀　竹内鍵二　西村欽也　今枝良治
狂　柑子　佐藤卯三郎　井上松次郎

五月十二日　正楽会
能　小袖曽我　浅野恭子　郡幸江　三村恵子
能　佐藤秀雄
能　百萬　苅屋稔　野村又三郎
能　鞍馬天狗　山森幸男　佐藤卯三郎　今枝良治
狂　盆山　井上祐一　佐藤友彦

五月十九日　藤田清兵衛三十七回忌追善、藤田昭彦後嗣披露
能　蟬丸　観世喜之　観世元正　西村欽也　佐藤卯三郎
能　鷺　金剛永謹　西村弘敬　井上祐一
能　舟弁慶　宝生九郎　高安滋郎　和泉保之
狂　祐善　井上松次郎　河村丘造　井上義次

五月二十六日　鳳鳴会　午前九時始
能　忠度　佐地吉左衛門　西村弘敬　井上礼之助　山本一　高安滋郎　佐藤卯三郎　井上松次郎
能　安宅　佐藤秀雄　山本光次郎
狂　井礒　佐藤秀雄　佐藤友彦

狂言の解説

柑子＝見事な三ツ成りの柑子を主より預つた太郎冠者、余りの見事さについ一つ二つと食べてしまつた。その云い訳に一つはほぞぬけ一つはつぶれと云い抜けたが最後の一つに困つて俊寛の故事を考へ出したが、主の方はそうそうこの話にのつてはくれなかつた。

盆山＝盆山の好きな男、見事な盆山を所有する知人に内々所望していたが、仲々呉れられぬに業をにやし、月夜かげに忍び入つて案内なしに借らうとするが見付けられて散々なぶられる。

祐善＝珍らしく舞狂言、能と同じ型態をふんでいながら其曲柄は日本一下手な傘張り祐善の幽霊が現はれて傘を張り死んだいきさつを語る。中入もある。間語りも出る。待謡もあるといつた純然たる能形式である。

井礒＝座頭二人川を渡るとて石を投げて深浅を探つて菊市が匂頭を背負つて渡らうとする、見ていた男之を利用して匂頭になりすまして河を渡つたが、お陰で菊市は改めて渡り直すとて深みへずんぶり。

翁の小鼓を三代で勤めまして

田鍋惣太郎

昭和三十八年四月四日午前十一時始
於　内宮能舞台
伊勢大神宮奉納能　大槻清韻会

翁　シテ　大谷一三務
面箱　茂山真吾
三番三　茂山千五郎
千歳　川村鍈雄
小鼓　大鼓　脇鼓　河村総一郎　脇鼓　田鍋惣一郎　頭取　田鍋惣太郎　笛　藤田六郎兵衛　田鍋洋一
後見　大槻秀夫
地謡　文蔵、泉、殿島初め一門
ほかに能羽衣和合、紅葉狩、狂言、舞囃子、謡吟、仕舞

此度は遇然三代で翁の小鼓を勤めました。古来一家三代での翁は稀しい事と、東西の楽師諸氏よりもお祝詞を頂きました。笛は藤田で一家四人奉仕致しました次第です。

当日は晴天に桜花満開の神苑、各役共立派に無事演了喜んで居ります、御同席の大倉長十郎師が後見をして下さいまして、良い思い出になります。

私翁は各流家元始めお相手致し、五十余回勤めました。当地の那古野神社能舞台披（明治三十三年四月一日、三日間、翁付五番能）

呉服町能舞台披（明治四十二年十月二十三

日、二日間、初日翁付五番能）布池町能舞台披（昭和六年四月二十五日、二日間、初日は翁付五番能）

熱田神宮能楽殿披（昭和三十年十一月十七、十八日、二日共翁付右舞台披翁頭取は全部勤めました。

東西の舞台へも度々出勤致しました。何度勤めましても翁は厳粛な曲にて、謹しみ緊張して勤めます。明治維新迄は七日間別火して各役共勤めたものです。今でも当日楽屋では別火をいたします。私は十五才の時脇鼓、十七才の時頭取を披きました。此の曲を勤めました後は、とても気持のすがくしいものです。

神宮奉納能には永年奉仕して居ります。翌五日も快晴にて、全舞台に金春流の奉納能がありました。

「舞囃子高砂　シテ　金春欣三　小鼓　田鍋洋一
能　桜川　シテ　本田秀男　小鼓　田鍋惣太郎
能　山姥　シテ　金春信高　小鼓　田鍋惣一郎

両日共一同つゝがなく奉仕、神護の賜と悦んで帰りました。

昭和三十八年四月十五日認

（能楽協会名古屋支部長）

狂言往来

野村広二

三月三十一日、中日五流能をみる。七番の能のうち、五番までが世阿弥作、一番は世阿弥をあつかつた新作で、世阿弥に集中された企画が、とりあげた曲目に注文はあつても、まづ目をひくに十分であつた。ところが、第一部の少しもり沢山なこと、次に新様式、つまり、仮設の舞台を組まないことが、折角の興趣をそいだ。舞台をおちつかなくし、能の本質である固い結晶の美しさを雲散霧消させてしまつた。たとえ、その反面、広々とした解放感にも似た新しいよさは見出せたにせよ、失われたよさを補うには十分でなかつた。その発表も、筆者の誤りでなければ、演能当日であつたようで、「世阿弥」や演目の解説が詳細をきわめたのに比べて簡単であつたし、よいことなら、なぜもつと大きく愛好者に紹介してもらえなかつたのであろう。

新作のことは、「世阿望憶」の最後で三人のツレがそろつて再登場しない今度の演出の方に効果があるけれども、シテは動き出すと、老女のカタチになるのには、不審をもつた。○○新作狂言「狐川」も感心しない。要するに番組立、舞台、新作のどれにも、企画者の賢明、慎重を切望したい。この時の弥五郎翁の「栗焼」は出色。それと、四月、東本願寺能でみた、（この能はぜひ一見をおすすめしたいが、）金剛巌の「大原御幸」、千五郎の狂言「千切木」（ちぎりき）と、やるまい会の野村万之亜の「那須与市の語」は実にすばらしかつた。やるまい会の野村又三郎は芸にくどさのなくなつてきたのが、近頃の精進の賜物か。それにきれいなねばりも「祐善」にみられたが、淡々とした口調は、かえつて「なわない」のおかしさを消して、冷めたいものにしていた。芸の修得はむつかしい。

「世阿弥」には、京都で、「世阿望憶」ほかの能組で催され、金沢でも、九月におこなわれる由、盛会を祈りたい。

六月の予告

六月二日　朝日狂言会　午后一時始

六月十六日　観世会

能　盛久　梅若万三郎
　　井上礼之助
能　玉葛　大槻秀夫
　　佐藤秀雄
能　山姥　観世鉄之亟
　　井上松次郎
　　佐藤卯三郎
狂　雷　河村丘造

六月二十二日　一謡会

能　巻絹　祖父江修一
能　女郎花　佐藤秀雄
　　河村鉦二
　　井上祐一
狂　抗か人か　佐藤卯三郎
　　河村丘造

六月二十三日　宝生会

能　社善　若辰己
　　知鳥　宝生英雄
狂　空腕　佐藤秀雄
　　井上松次郎
　　井上祐一

六月三十日　掬水会

能　氷室　柴田収武
　　井上松次郎
能　熊野　久田秀雄
　　観世元昭
能　小鍛治　井上祐一
狂　水汲　佐藤卯三郎
　　佐藤秀雄

お披きのお知らせ　楽師協議会

近藤　萩氏　囃子　披　片岡　社中
川田　恒子氏　囃子　披　殿島　社中
田辺　典子氏　能　胡蝶　披　内藤　社中
木下弥兵衛氏　能小袖曽我披　加藤良社中
小瀬　静夫氏　能　蝦丸　披　内藤　社中
杉原喜美穂氏　能　鄙丸　披　内藤　社中
丹羽兵三郎氏　素　謡　披　野村　社中
水野　正嘉氏　素　謡　披　野村　社中
井口　晴康氏　狂　言　披　〃
井口きくゑ氏　小　舞　披　〃
山本　恵三氏　〃　〃　〃
後藤　紀一氏　素　謡　披　〃

凡ゆる工業用品御用達
機械工具商
株式会社　水藤商店
名古屋市熱田区神戸町一五一番地
電話代表 ⑥7 5231

株式会社　スイトウ製作所
本社並に機械加工工場　名古屋市瑞穂区明前町三丁目二八　電話 ⑧1 8225・8401
プレス鈑金及び製缶工場　名古屋市南区豊中町三ノ十一　電話 ⑧1 831・8768

狂言

昭和38年6月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5ノ2
井上富兵衛方　電㊟1430
名古屋狂言共同社
印刷所
株式会社　地上社　電㊟1196

狂言人語

共同社

春の長雨も晴れ間を見せて六月の青葉を渡る風に、夏の近づくを感ずる此頃月初二日の朝日狂言会第五回も無事に好評裡に演ぜられまして皆様の心からなる御声援に一同深く感謝しております。今後共よろしく御後援の程願上げる次第であります。

名古屋出身東京女子大学教授　古川久先生が多年の研究を重ねられた労作狂言辞典、語集篇が東京堂より発刊されました。一冊を求めて早速拝見、昭和十四年以降二十有余年に亘り集められた語数は約一万、これに概説と曲目所在一覧索引は固有名詞、和歌、連歌、歌謡、漢詩、故事、俚諺、呪文、経文等に分類して誠に完璧なこころくばりの辞典というべきでしょう。

古川先生は後記でその内容語集等について種々修整不完全であつた御不満をもらしていられるが、その真面目な発表態度は只々敬服する外ない。

去月十七日夜、日本の芸能（NHK綜合テレビ）で大蔵流茂山幸四郎氏の奈須　和泉流和田喜太郎他の梟山伏の上演が横道万里雄氏解説で放送された。五月四日、岩手県の山伏神楽の公演がまつり同好会の主催で能楽殿にあつた非常にひなびた、伝統芸能であつたがあした場所で、ああした環境で見ると矢張り、何となく、穴というか、どこか、そぐわないものが感じられたのは私だけの事だろうか。太鼓と鐘、そして舞う者は太鼓を前として相対するために正面は、何時も一人後向きになる背中の奉納染が気になつたのもそのせいかもしれなかつた。

芸には矢張りうけつがれた伝統のままの素朴さが光つていた。古いものには違いないと感じ入つたことである。

五月十五日付朝日新聞紙上に渡米した野村万作氏がシアトル市のセンタープレイハウスに於て「梟山伏」「三番叟」「棒しばり」を上演、鋭い反応を示した観客の熱心さを報じておられました。追々と世界的に紹介されてゆくこの古典の完成された演技は益々評判となつてゆく事でしょう。

愛知県立女子大学教授渥美かをる先生が中日文化賞を受けられました。

平曲の曲節付を理論づけ系統たててその変化も推論するという国文学界でも初めての研究が国文学界の注目を集めるに至つたもので大変な努力の成果といえるでしょう。心からお喜び申上げます。

（文責　佐藤）

六月の催能

六月二日　朝日狂言会　午後一時始
六月五日　熱田祭奉納　午後一時始
囃子仕舞　小舞他

六月十六日　観世会　正后始
能　盛久　梅若万三郎　高安　滋郎
間　井上礼之助
能　玉葛　大槻　秀夫　西村　欽也
間　佐藤　秀雄
能　山姥　観世鉄之亟　高安　滋郎
間　井上松次郎
狂　雷　佐藤卯三郎　河村　丘造

六月二十二日
能　巻絹　祖父江修一　高安　滋郎
間　佐藤　秀雄
能　女郎花　河村　鉦二　西村　欽也
間　井上　祐一
狂　杭か人か　佐藤卯三郎　河村　丘造

六月二十三日
能　杜若　辰己　孝
能　善知鳥　宝生　英雄
間　佐藤　友彦
狂　空腕　井上松次郎　井上　祐一

六月三十日
能　氷室　青陽会　柴田　牧武
間　井上松次郎
能　熊野　久田　秀雄
能　小鍛冶　観世　元昭
間　井上　祐一
狂　水汲　佐藤卯三郎　佐藤　秀雄

狂言解説

佐藤　秀雄

雷＝藪針医、武州武蔵野にて夕立に逢う、驚きあはてる針医の目前に雲踏みはづして落ちた雷は、中風のかげんで腰が痛くて起てない。針医を見付けた雷は治療を頼む。超人である雷が人間以上に痛がるその可笑しさ、腰の痛みもとれて天上しようとする雷に爽代を請求する針医、人と超人の問答のおかしさをすらすらと流す此作者は、たしかに優れた感覚を持つたユーモリストである。

空腕＝日頃空腕立てをする太郎冠者を今日こそ試さうと、日暮れに及んで使に出す主は、臆病者の太郎冠者が命乞いに差出す太刀をとつて帰りを待ちうける。かくともしらぬ太郎冠者は輪に輪をかけた空腕立で太刀のなくなつた申訳をする。さて主から差し出された太刀をみて……

杭か人か＝是も臆病者の太郎冠者只一人で留守を仰付けられ槍を持つて火の用心と夜廻りをするは殊勝だつたが、陰におびえ、物におそれ、あげくの果ては、暗闇に立つた主を杭か人かと聞いて杭といわれて、ヤレヤレと胸をなでおろす可笑しさ。

水汲＝住持から野中の清水を汲めと頼まれた新発意日頃から仲の良い近所の娘を頼んで水を汲みにやる。小謡をうたつて水を汲む風情にそぞろ心動かされた新発意は種々と小謡まぢりで口説にかかるが、はてはざぶりと頭から水をかけられて……。

似合はしからぬ女と新発意、綿々として心の通い合う風情から当時の情抒を汲み出してみて頂けますと又一入面白いと存じます。

〔狂言不審紙より〕

共同社編

◇雷について本朝塵滴天文の部に云。

陰陽を包うこいて撃する是を雷と云。
松尾社山城国梅津の西に有、後に別雷山有、鎮座記に云、元明帝、和銅二年四月十一日、始て加茂より山城国山田庄荒子山に伝へ奉る。加茂の朱塗の矢化して松尾の神と現ず。
相坂山の西山科のほとり雷神の社
　夫木
鳴神の音羽の滝やまさるらん
　関のこなたの夕たちの空　中務親王
松尾大明神御神詠
山城乃別雷山爾宮居士亭
　天降古登神代与利佐茂
◇次第に
薬種も持たぬ藪薬師　木はたや頼なるらん
　按に薬種は持す樹の皮が頼み也と言下手医師と云か
◇くわはらくわはらと云
昔和泉国和泉郡桑原井と云うへ雷落ちけり、井より上らんとするに、人集て井の上に蓋を覆うて責る事良久舗、雷大きに苦て誓て曰、永く此地へ落る事なしと云ければ、蓋をとりゆるしやりぬ、夫より此所に雷落る事なし雷鳴の時桑原々々と云は此謂也。
◇アトの打針は駿河流なるべし
◇空腕について
此狂言詞の通別に不審なし
空腕立の根なし言をいう故に此狂言の名目とする。
◇今から淀へいて鯉を求めてこい
淀は京より南の方三里に有、淀の鯉は名物也、顕注密勘に云、淀はよどみを言、水の流もやらで滞りぬるくとまれる也、夫を淀と言。河淀共詠り。此淀川と言は桂川鴨川宇治川木津川等の落合うて深ければ、淀みぬるく流れる也歌にも
　のぼりえぬ淀の桴の縄手なり
　　この世ばかりを引人もかな
　　前内大臣実
◇鳥羽は洛外にして、四ツ塚より南七町にあり、上鳥羽下鳥羽二村あり、歌に
　雲井飛雁の羽風に月寒て
　　鳥羽田の里に衣うつなり
　　後鳥羽院
竹田秋の山と言は鳥羽法皇城南離宮を営給ひし時四季の風景を作り楓を多く植え給う所を槌の山と云う。
◇東寺は又左寺とも云、京都大宮の西八条八幡山教王護国寺秘密伝法院と云う真言宗の源にして開基弘法大師の旧地也。
伝記に云う。大師讃洲多渡郡屏風浦の産、光仁帝宝亀五年に誕生有り。十八才にて大学に至り延暦十四年東大寺の檀に登り、具足戒を受け、名を空海と改め、同二十三年五月入唐して青竜寺の慧果阿闍梨に謁し、彼経の奥儀真言秘密を受、大同元年十月に帰朝あり、宗風日本に弘まり、弘仁七年に紀州高野山を給はり金剛峯寺を建立し承和二年三月二十一日入定す。延喜二十一年に弘法師と諡名を宣下あり。

狂言往来

野村広二

五月は多事です。「朝日ジャーナル」（五、二六号）に新猿之助の「黒塚」（安達原）のすばらしい写真がのって目を喜ばせているが、名古屋では、愛知県立女子大の渥美かおる教授に、平曲研究で、中日文化賞受賞がきまった。平家物語のことであるが、藤井制心氏の平曲採譜と並んで、長年の研究が、学位授与の次に実を結んだことに対し、はるか東京の空へ向つて敬意を表したい。今は名古屋だけに伝えられているときく平曲（平家）は能の取材には大事な芸能、文学だったし、狂言にも「清水座頭」「伯陽」などは、それを語る琵琶法師のことがおもしろく扱われている。地元のこととて、お聴きになった方も多いでしょう。故吉川英治氏の「私本太平記」には、この平曲で登場する。高氏ゆかりの親子二人の人物が、魂にふれる情風を終始与えてくれます。それに観世に関係のことがロマンティックに扱われているのも「世阿弥」の一つの記録となるでしょう。次に先頃の「仏教美術展」で観音の微笑の口元をみたとき、能の若い女面の口元とおなじ刻み方をみつけて、ああここにも日本的な「きよらかさ」の表現があるとおもった。年代では能面の方が新しいのだが、一つの系列をこの口元一つにみつめて、考えながら連れと二人で随分と間その仏様たちの前に立つていた。「円空」にもみつけたものだった。野村万作の「アメリカ便り」（朝日）、観世寿夫の帰朝談（観世）に、テレビドラマ「孫次郎」関西勢による「世阿弥研究」元昭の「敦盛」茂山圭五郎の「那須語」（NHK）、語ることは多いが先へ進んで寿夫の「鉄輪」と藤田追善能の狂言「祐善」がおもしろかったことを特筆したい。後者の、能形式のなかにだしたかるいおかし味は、一見物足らぬようで、実はなかなか貴重なものだ。このとき、藤田昭彦君芸嗣発表の「鷺」は当の昭彦少年の笛のできは申すにおよばず、シテ金剛永謹、太鼓前川光長とともに三少年の、長老にまじり、三家元の後見にまもられた晴やかな舞台が、何度も強い拍手で祝福されたが、二代つづいて岡谷鎌山氏があいさつされたことも、父であり家元である六郎兵衛の「獅子」（太鼓金春惣右衛門）とともに記念すべきことであった。「世阿弥」のことは、「金剛」（五八号）の将来で、「芸論」（番西精）「悲劇」（田中重太郎）は興味がありますし、能芸論にふれる「絵巻」（武者小路穣、美術出版社）の寸見も楽しい。また「芸能史研究」（創行号）には「室町時代の狂言と天正狂言本」（北川冬彦）に「世阿弥論をめぐつて」（植木行宣）の一読をおすすめしたい。
　さて演能では、これから夏にかけて、「朝日狂言会」と鎮之丞の「山姥」が期待されよう。

世阿弥生誕六百年記念

大衆普及能

於　文化講堂
八月十四日（水）　午後四時始

能　田村
囃子　加茂　観世喜之　吉田定男　鬼頭八郎
後　殿島修二　田鍋惣太郎　藤田六郎兵衛
前　河村鉦二　西村欽也　筧鉱一　福井啓次郎　鬼頭季信
仕舞　吉野天人　有賀滋子
〃　玉ノ段　辰巳孝
〃　藤戸　宝生九郎
〃　笹ノ段　柴田初太郎

能　羽衣
囃子　安宅　和島富太郎　河村総一郎　田鍋洋一郎　金森準三
内藤泰二　高安滋郎　吉田定男　後藤孝一郎　野崎太郎　筧三男
佐藤秀雄　井上礼之助
狂言　蟹山伏　井上松次郎　豊島弥左衛門
仕舞　鵜ノ段　西尾孫太郎　青木恒治　助川竜夫　金森準三
囃子　熊坂　桜間竜馬　河村総一郎　田鍋惣一郎　鬼頭喜太郎　小島鉄次郎
能　葵上
ツレ　片岡道子　大塚一二　高安滋郎
シテ　井上祐一
間

主催　能楽協会名古屋支部
後援　朝日新聞名古屋本社

牛飼車

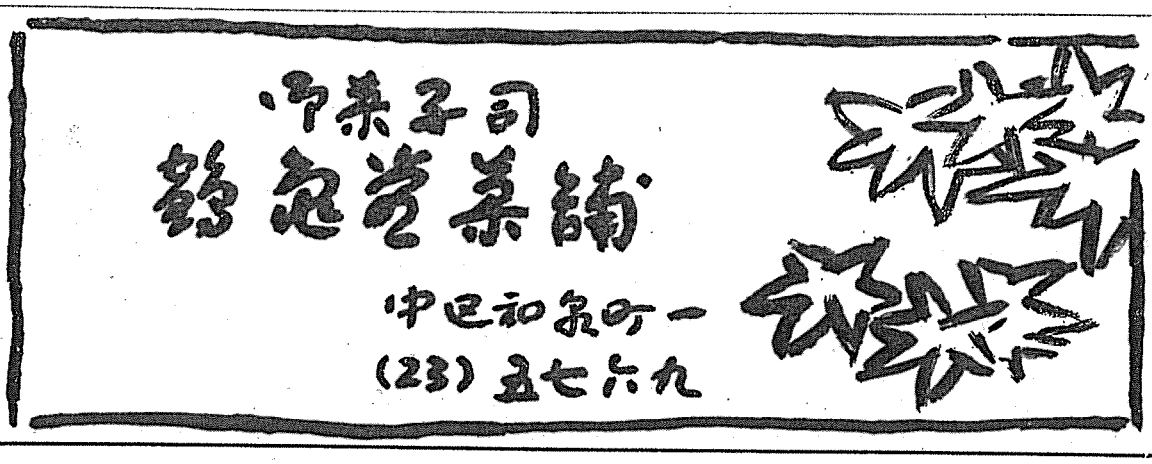
西村弘敬

先頃或る門人から熊野の謡にある牛飼車とはどんな車ですかと質問せられた、なる程今時の若い人に、今から約八百年も昔の、源平時代の風俗習慣など判らないのは当り前でしよう。其の当時の実物は牛車であつて、能く世間で御所車と謂われてる車である。絵などにもよく画かれて居る物で、大体宮中を始めとして貴顕高官が乗るもので、一般大衆には今日の「タクシー」を利用する様には出来ないものであつた。此の車の実物は、今日では殆んど見る事は出来ないが、毎年五月に行なれる京都御所の葵祭の時に、行列の中に二輛引出される。先日葵祭を見物に行つて始めて実物を見て、其の堂々たる威容に驚いた次第である。車輪の直径も六尺以上ある様で全体の車の高さは十五六尺もあると思われ、屋根の構造や装飾で色々の名前があつたとの事である。唐庇車、雨庇車、網代庇車、糸毛車、半蔀車、其の外にも種々の名前があつたそうで、内糸毛の車は貴婦人専用の車で、青毛、紫毛、赤毛の三種類あつた。之れ等の車は何れも牛に引かせるもので従つて其速度は至極のろのろと悠長なもので、彼の木曽義仲が都へ責め登つて、平家を追い落して自分は公郷然と車に乗り参内する途中に、余りの悠長さに業（ごう）を煮やし、自分に鞭で牛の尻を引叩いたため、牛が怒つて無性に走り出し困つたという失態を演じた笑い話もある。そこで馬車には馬を扱う馬丁がある様に、牛車にも牛飼いと云う専門の職があつて牛を取扱つて居た。熊野の謡の「牛飼車よせよとて」とあるのは「これ牛飼いよ、早く車を持つて来い」と命令するのであつて、牛飼車という車ではないと説明した事であつた。

（高安流）

七・八月の予告

七月六日　調友会袴能　午後五時
能　百　間　萬　山本博之　高安滋郎
井上松次郎
七月十四日　淡交会　素謡会
七月廿八日　淡水会　歌仙会
八月四日　たい雲会　素謡会
八月十四日　於文化講堂　午後四時
世阿弥生誕六百年記念能
能　田村　殿島修二　河村鉦二　西村欽也
〃　羽衣　内藤泰二　高安滋郎
〃　葵上　大塚一二　高安滋郎
間　井上祐一
狂　蟹山伏　井上松次郎　佐藤秀雄　井上礼之助
尚宝生九郎師　観世喜之師　桜間竜馬師
辰巳孝師　豊島弥左衛門師　和島富太郎師
の賛助出演あり



八月十八日　宝生流嘱託会
八月廿五日　たなびき会
九月八日　松謡会
九月十五日　観世会　素謡会
景清　藤井　久雄　梅若　猶義
野宮　梅若　猶義　井上　嘉久
藤戸　井上　嘉久　藤井　久雄
九月廿二日　婦人師範連合会
九月廿四日　大塚清風社
九月廿九日　掬水青陽会

不審紙漫筆 ①

狂言不審紙をひもとくと種々狂言に対する質疑が書きとめられているが、最初に書きとめられているのは「抑狂言の意味は、花伝書又は童草肝要集などに、とおつ祖のしめしおかれし昔より、流れを汲るもろ人不審の数を尋ぬれど答えず、押して問うに、大昔より伝はりし業の秘事口伝を守るふしんはさることになん、狂う詞と書くを知らずやと答えしと聞き待れば、

唯いつ迄も不審のままに守り、おのれが愚智にまよい、今様のことわざに競ぶべからず。ふしんの儘に守るこそ肝要ならめ」とあり、これが本心であろう「さはあれその職として其わざの不審を捨置くも本意ならず我愚鈍に待れば諸人に聞、亦は愚なる考も彼是となく記しぬ」

と前書をして本文にいる。

そして第一にあげられているのが、「唯狂言は七事の調子こそ専に心得よと教られし。七事とは所謂

1、神
2、貴（大名）
3、賤（下郎）
4、僧
5、山（山伏）
6、女
7、鬼

その程位第一なり、其程位とは歌にも

歳毎に春知り顔の梅桜
　木を割りて見よ、花のありかを

と斯く詠ぜしも是等のことにや

昔よりの教にも

あふ坂の関の清水にかげ見えて
　今や曳くらん望月の駒（貫之）
逢坂の関の岩かとふみならし
　山立出るきもはらのこま（高遠）

此二首の歌よくよく心得べし

編集後記

狂言人語担当せられました歌村彦四郎氏病臥の為、内容が少々おめだるい点があると思いますが、今後共種々と情報をとりまとめて、狂言を主体とした名古屋の情勢を一口づつまとめてゆきたいと存じますよろしく御後援下さい。

お披きのお知らせ

楽師協議会

石田糸代氏　能景清披　柴田社中
小森数義氏　囃子披　丹下社中
伊藤久子氏　囃子披　野口社中
佐藤和子氏　囃子披　山田社中
水根純　〃　囃子披　山田社中
早川つねよ氏　囃子披　柴田社中

舞　見　中　暑

一謡会　河村鉦二
石井会　西尾孫太郎
藤門会　加藤良久
長生会　鬼頭八郎
竜吟会　藤田六郎兵衛
観衛会
霞会　田鍋惣太郎
潤水会　林甲子男
観水会　野崎太郎
観正会　久田秀雄
春星会　片岡道子
高安会　高安滋郎
たなびき会　田鍋惣一郎
名古屋能楽鑑賞会　田鍋惣太郎
名古屋[illegible]倶楽部　植村真太郎

風韻会　殿島修二
幸友会　福井啓次郎
金剛流松風社　片野東四郎
掬水会　柴田初太郎
曲水会　増田一雄
金竜会　金森準三
金桜会　前田昌広
春鶯会　山田仁三郎
正楽会　加藤丈太郎
松謡会　佐藤太俊
清風社　大塚一二
掬水青陽会
能楽協会　名古屋支部　支部長　田鍋惣太郎
名古屋　和泉会　会長　徳川義親
狂言　共同社（イロハ順）

狂言

昭和38年9月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5ノ2
井上寅兵衛方　電㊟1450
名古屋狂言共同社
印刷所
株式会社　地上社　電㊟1186

狂言人語

共同社同人

共同社代表として病苦をこえて御尽力頂きました歌村彦四郎氏も去る六月二十四日不帰の人となられました。一同心から哀悼の意を表して、告別式に参列帰らざる故人を偲んで涙し、多難なる共同社の前途を思つて、愈々芸事精進を覚悟した次第であります。生前の御交誼を故人に代つて厚く深謝するものであります。

暑さもやつと下り坂となり、立秋の声に涼風立つてしのぎよい気節となりました。

八丈島の航空機の山へ衝突した事故、沖縄沖のみどり丸事件と、不相変、血なまぐさい事故の続発する世相ですが、心温まるニュースは声を大にしておしらせしたいものです。

在米中の和泉流野村万作氏及万蔵氏は好評の内に狂言の普及教授に尽粋せられておりその成果は考えただけでもすばらしいものだと思います。

中日狂言名人会も計画されて芸術の秋は又々盛り沢山の演能を控えております。我々の和泉会も番組決定して稀曲大曲を揃えて、保之師、三宅藤九郎師の上演を期しております。皆様、古典を通して心のゆとりとおおらかな精神を養いましょう。

能楽協会名古屋支部長田鍋惣太郎氏は御病気の由でしたが其後すつかり回復され以前にもました健康さで八月四日の宝生能同十四日大衆能にも元気一杯のお姿を見せられました。斯界の為喜びにたえません、心からお自愛を祈つてやみません。

九月の催能

九月　一日　竜吟会　岡崎随念寺
九月　八日　松謡会
能　三　輪　佐藤　太俊　西村　欽也
間　佐藤　秀雄
九月十五日　観世会
能　花　月　柴田初太郎　高安　滋郎
間　井上松次郎
九月二十二日　婦人師範連合会
九月二十四日　大塚清風社　囃子会
九月二十九日　掬水会
能　巻　絹　加藤丈太郎
間　河村　丘造
能　盛　久　河村　鉦二
間　井上礼之助

狂言解説

佐藤生

能　土蜘蛛　観世　武雄
狂　雁大名　佐藤卯三郎
間　佐藤　友彦
佐藤　秀雄
井上松次郎

雁大名＝世事にうとい大名、帰郷の為に客を招く、手許不如意の太郎冠者不時の来客用肴に困つて、苦心の果て魚屋の店先で雁を買うと契約しておいて、大名に横取りをさせて馴れ合いけんかの一幕、驚ろいた亭主のおろおろするすきに太郎冠者は雁をツイと…。やがて帰つた大名は、之もまけずに棚のふくさを懐中していたとは……。

藝術と感情(一)

西村弘敬

何の芸術でも看る人、聞く人に、何等かの感動を与へるものでなければ芸術とは謂はれない筈である。従つて舞台上で演ずる諸芸でも、演者自らの持つ感情の深浅功拙によつて観客の受くる感動の程度も色々に変はるのは当然の事であるが其の演芸の種類によつて感情表現の方式とでも云うものが色々ある様だ。是を大別すると誇張型と内面型とある。誇張型といえば喜怒哀楽其の他の情を吾々の日常生活に於ける実際行動よりも大々的に誇張拡大して甚だしく大げさにやるので、例えば義太夫の語りの時の豪傑笑いの笑い方や、泣き悲しむ悲泣の声とか、或いは歌舞伎芝居の時に見られる諸種の型ところとか色々の所作などには非常に誇張された仕方などが用いられて居る。

能楽の世界の内でも狂言の方には此誇張型に属する型が大部用いられて居る様に思はれる。能の方はこれとは正反対に凡てが内面的である。内面的とは実際行動よりも凡てが控へ目にやるのであつて、仕方には昔から一定の型が定まつて居る。例えば、喜びの情を表はす型には「ゆうけん」又泣く型には「しほり」「もろしをり」とか失望とか失敗とかには「両手打合せ」の様に色々と定まつた型もあるが、これと同時に演者自身の心の内に持つ感情、これは外面に表はす事は出来難いが、然しこれが甚だ大切であつて、此の心持ちの深浅大小は自然其場の雰囲気の中に感得せられるのである。「シテ方」「ワキ方」「ツレ」等の立ち方は勿論、「大小囃子方」「地謡方」の人々にも此心持の持ち方は大切なものである。これ等の感情の事は昔から凡て「心持ち」と教えられ、喜怒哀楽の外に人間特有の感情即ち「羞耻」（はづかしい）「可笑」（おかしい）「驚駭」（おどろき）等心持ちを充分に体得して謡ふ謡や詞（ことば）にも、或いは笛や鼓の音色、掛声など凡てに渉つて此心持ちが内面的に自然に表現されて「趣」（おもむき）が出て来るのである。現代の言い方では表情とか感情表現などと云うが、昔から斯道では「心持ち」「趣」（おもむき）と謂はれ

て、謡も詞も舞も型も囃子も凡て「趣」のないものは甚だ味のない無味乾燥のものとせられて居る。

然し乍らこれ等の「趣」とても余り程度を超へては所謂芝居じみる事となり能の限界を外れるので其の限度がむつかしいのである。（つゞく）

狂言往来

野村広二

六月二四日、狂言共同社筆頭の歌村彦四郎氏物故。まことにおだやかな人柄。晩年は舞台に余り立たれず、後見座にまじめで地味な姿をみかけることが多かつたが、それでも、亡くなられる一、二年の間には、たとえば、「鷺」の開口、「弥宜山伏」の大黒天など印象にのこるもので、なぜか松坂屋の舞台の「舟弁慶」の間の力演がいまだに忘れられません。名古屋、東京のよきまとめ役、茂山弥五郎翁も故人とは親しく、ある年など、炎暑のなかを「急にあいたくなつてたづねてきた」などという親交ぶりであつた。冥福を祈りたい。それにしても、名古屋三長老についてともに病気養生中、今後の進退にくわしくふれていた能だよりが出たが、あやまつて読むと、死は若者より老人のところへ早く、そして長老たちのあとにつづくものは、いまこそ「能界の宿弊」を改めるがよいというような書き振りに読まれ、かえつてその直截な筆意が、三長老には随分失礼、能楽界も、ああいう風に書かれないよう、しつかりしたものを持つてほしいと願はずにはおられなかつた。

例年の大衆能（八月）の「蟹山伏」は、いつみてもおもしろいが、蟹の精がもう少し強いとよかつた。ほかに、東京、「白木狂言の会」が九六回で閉会になつた。これからはカタチをかえて継続するとのことだが、その大きな業績をたたえたい。第九六回の、最後のパンフレットは四八頁にわたる、諸記録をおさめたまことに貴重な資料です。本では、湯川秀樹著「本の中の世界」に「狂言記」の項がみ出されます。「図書」でよんだときにはなかつた口絵に「庵の梅」がのせられている。白州正子さんの能面の本。年末には、徳川美術館の装束集がオールカラーで出版される由。昨年からの諸企画の大努力は驚歎のほかない。野村万作君の「アメリカ狂言だより」（朝日）も興味が深い。「世阿弥」関係は、先述の大衆能が今年は世阿弥を記念し、名古屋能楽界全力をあげておこなわれ、世阿弥の三作品上演で、能芸普及につとめた。そのとき、舞台から終始何かざらざらしたものを感じた。あれが名古屋能楽界の空気だつたら、これからはと、不安にかられないではいられなかつた。秋の演能に期待したい。

十月の予告

十月六日　大塚清風社十五周年記念能
能　半部　秋田　佐藤秀雄
能　小原御幸　金剛巌　井上礼之助
能　大江山　豊島弥左ヱ門　井上祐一　佐藤友彦
狂　鐘の音　佐藤卯三郎　井上松次郎
十月十三日　中部金春会
能　俊寛　佐藤卯三郎
能　松風　佐藤秀雄
能　石橋　内沙汰　和泉保之　井上松次郎
狂　十月十九日　梅猶会　素謡会
十月十九日　中日狂言会　文化講堂
十月二十日　淡交会
能　三井寺　遊行柳
十月二十七日　名匠鑑賞能
能　景清　観世喜之
能　花筐　梅若六郎
能　乱　金春信爵　本田秀男
狂　千鳥　和泉保之　佐藤卯三郎

お披きのお知らせ

楽師協議会
菊地重郷氏　囃子披　杉村社中
加藤三奈氏　囃子披　〃
仲林義治氏　〃　殿島社中
高見敬一氏　〃　〃
平野陽子氏　〃　〃
祖父江修一氏　能巻絹披　河村社中

後記

ささやかな小紙ですが西村先生より玉稿を頂き或いは又見知らぬ読者の方より御声援を頂いたり又お叱りを受けたりして段々とよりよい紙面として行きたいと存じます。行届かぬ事計りですがよろしく御指導下さい。

名菓

登録商標
御千代宝

登録商標
うすらひ

登録商標
桐壺

登録商標
室の梅

登録商標
城で餅

登録商標
夏の霜

中区宝町一丁目
名古屋　亀末廣
電話(97)三二〇三
九三四四
九三五二

狂言

昭和38年10月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5ノ2
井上眞兵衛方　電㊤1430
名古屋狂言共同社
印刷所
株式会社　地上社　電㊤1196

狂言人語

共同社

今年は例年に無く早く来すぎた秋風に九月と云うに朝暮肌寒さを感ずる今日此頃、秋風と共に橋岡久太郎先生の仆報を聞きました。諸行無常、謹んで殊更名古屋と縁の深かつた先生に哀悼の意を表わしますと共にそぞろ秋の淋しさをひしひし感じます。

十月の催能

十月六日　大塚清風社十五周年記念能

能　半蔀　秋田　葉子　岡治郎右ェ門
　　間　佐藤　秀雄
能　小原御幸　金剛　巌　西村　欽也
　　間　井上礼之助
能　大江山　豊島弥左衛門　高安　滋郎
　　間　井上松次郎　佐藤　秀雄
狂　鐘ノ音　佐藤卯三郎　井上松次郎

十月十三日　中部金春会

能　俊寛　前田　昌広　高安　滋郎
　　間　佐藤卯三郎
能　松風　桜間　竜馬　西村　欽也
　　間　佐藤　秀雄
能　石橋　桜間　道雄　高安　滋郎
　　前田　茂穂
狂　内沙汰　和泉　保之　井上松次郎

十月十九日　中日狂言会　於文化講堂

十月廿日　淡交会　午前十時

能　三井寺　伊藤　長八　高安　滋郎
能　熊野　佐藤卯三郎　佐藤　友彦
　　間　前田熊太郎　岡治郎右ェ門
能　遊行柳　岡田　頼允　高安　滋郎
　　間　佐藤　秀雄
能　猩々　北村　利弥　西村　欽也
狂　狐塚　井上松次郎　河村　丘造
　　井上　祐一

十一月十日午後一時始
熱田神宮　能楽殿
名古屋市民芸術祭参加

第三回　和泉会

苞山伏　井上礼之助　野村又三郎　佐藤　友彦
貰聟　河村　丘造　佐藤　秀雄　井上　祐一
小舞　七ッ子　和泉　保之
宗論　佐藤卯三郎　井上松次郎　山本光次郎
素囃子　絃　内藤　泰二
　　上　河村総一郎　鬼頭喜太郎
　　田鍋惣太郎　藤田六郎兵衛
　　小沢　喜一　近藤　源十
　　竹腰　勝一　戸田　秀雄
地謡　鬼頭　嘉男　吉田　俊彦
閻罪人　三宅藤九郎　和泉　保之
　　野村又三郎
　　井上松次郎
　　佐藤　秀雄
　　井上礼之助
　　大野　弘之
　　井上　祐一

主催　名古屋　和泉会
　　狂言　共同社

十月廿六日　梅田邦久

能　隅田川　片山博太郎　高安　滋郎
能　舟弁慶　梅田　邦久　高安　滋郎
　　間　佐藤　秀雄
狂　附子　佐藤卯三郎　河村　丘造
　　井上松次郎

十月廿七日　名匠鑑賞能

能　景清　観世　喜之　福王茂十郎
能　花筐　梅若　六郎　高安　滋郎
能　乱　金春　信高　福王茂十郎
　　本田　秀雄
狂　千鳥　和泉　保之　井上松次郎
　　佐藤卯三郎

狂言解説

佐藤　秀雄

鐘の音＝我子の成人に黄金造りの小太刀を贈ろうと考えた主、太郎冠者に金の値を聞きに鎌倉へ行かせる。あわてものの太郎冠者、鎌倉中のつき鐘の音を聞いて歩く。

内沙汰＝大蔵流の右近左近と同断、我が女房を楽者に見立てて百姓右近の公事訴証の稽古、憶病者の右近は稽古が本物となつて平身低頭、遂に悲鳴をあげる。この主題は一転して女房の秘事のばくろとなつて、尻に敷かれた弱い男の精一杯の反抗は悲しい捨ぜりふとなつて終る。

狐塚＝狐塚の田へ番にやられた憶病者の太郎冠者、見舞に来た次郎冠者を狐の化けたものと早合点して縛り上げる。続いて見舞に来た主も縛りつけて松葉でいぶしてコンと云えクワイと鳴けの騒ぎ。

附子＝留守の両人に食べられまいと砂糖を附子と云つて出かけた主に、太郎冠者と次郎冠者は苦心のあげく砂糖と知つて食べてしまつた。さてその後の申訳を何としたか。

千鳥＝借りを返さねば酒をくれぬ酒屋から何とかして酒を持ち出そうと津島の浜の千鳥伏せから、やぶさめまでやつてみせる太郎冠者の苦心、かくまで苦労するも主の為とは。

藝術と感情（二）

西村　弘敬

茲に一、二の例を御目にかけよう。明治以後の名人として知られて居た金春流の故桜間左陣先生が「望月」の能を演ぜられたとき、狂言が宿を借りる問答の内シテ「あれなる御大名の御名字をば何と申すぞ」狂言が「あれこそは信濃の国の住人。望月の何……」口を押え「ハッ」とするときシテの左陣先生は「びくつ」とした表情で両眼を光らして見張り両手を少し張つていかにも驚きたる様をせられた。なるほど今少し先に旧主の奥方や子息が来て共に名乗り合い悦びをなしたる直後に、片時忘れぬ仇敵の望月が来たとすれば之れは大きに驚くのが当然であるのだが、其の以後各流色々の仕手方の此の能を見て居るに、何とか驚きの様をやつた人を余り見掛けない。勿論左陣先生のも大した大げさな仕方とは思えなかつたけれど何の反応も示さないのもどうかとも思われる。

次に之れは脇方の事であるが、鉢木

の能で論義の前の処でシテの零落の様を尋ね「さらばなど鎌倉へ御登りあつて、御沙汰には出され候はぬぞ」シテ「運のつくる処は最明寺殿御修行に……」此の場合最明寺殿とは脇自身の事を言われたので心の内で「ハツ」となる思いがする筈で心の中の変化はあつて然るべきであるが、是とても余り大げさにやるべきではないと思い、小生は心の内で「ハツ」とする様に勤めて居るが、茲まで見て下さる見物は余りないけれども、自分としては人に見えても見えなくとも其気分でいつも勤めて居る。

単に謡だけを楽しんで居られる方でも、此の心持ちという事を研究して謡われると自然と趣が得られる様になり楽しみも一層深くなる事と思う。況んや仕舞、囃子、能などと此の道を応く深く研究して楽しまれる御方には一層の必要性のある様に思われる。

狂言往来

野村広二

九月、御園座が新築落成、また、芝居好きの連中を楽しませることになつたが、あそこでは、戦後、演能が市一高女の講堂、商工会議所ホールで催されていたとき、本格の舞台で、狂言や能をみた思い出がなつかしい。弥五郎翁の「末広」、故井上新三郎氏の「寝音曲」など忘れられないし、「道成寺」（金剛流）もおこなわれ、人の目をうばつたものだ。あの頃と今とは隔世の感がある。あそこで「杜若」をまわれた橋岡久太郎氏が九月十五日に他界されたのは、寂しさひとしおです。きれいなカタチの能をまつた人でした。楽屋では、丹念にタバコをまいては口へもつていかれ、いつまで対座していても、気のつまることのないふんい気の方でした。若いときはハイカラで、外人に能をみせようと骨折られた逸話も、先輩の本にのつています。「竹生島、清経、熊野、班女、通小町、天鼓、張良」それに「卒都婆小町」などをみせていただいたが、放送はたしか「日本の芸能」（NHK）に「張良」の一回だけだつたとおもう（声の方は鋏之丞氏であつたとおもいます）。「名古屋と橋岡先生」は別の機会として、大正二年に「嵐山白頭」の記録がはじめてのようです。ご冥福を祈りたい。また先頃、ペルシャ美術展で名古屋和泉会の発起人の高木市之助博士におあいしたら、歌村氏のことを「おしい人をなくしましたね」といわれたが、重々しいそのひと言が胸にひびいてならなかつた。さて、本では、「日本美再見」（朝日）に、唐織の一頁が目にとまる。「世阿弥」では、俳優座の「世阿弥」公演。それから、中世文学の展開、展望、いやもつと広い視野から、世阿弥をみることも必要なことを行間に秘めて、かかれたのが、「北陸中日能」にのつた名大松村博司教授の「世阿弥十六部集の語句」とおもいま　それには、「中世的なものとその展開」（西尾実）「中世文学の世界」（西尾実先生古稀記念論文集）「中世文学の成立」（永積安明）とほかに「千利休」（唐木順三）がよい資料。なお「金剛」（第五九号）の「世阿弥の能」（林屋辰三郎）はぜひぜひ一読をおすすめしたい。

芸術祭の秋、十月は中日狂言会、十一月は和泉会、大きな期待がもたれる。

十一月の予告

十一月九日　一謡会

能　屋島　河村鉦二　西村欽也
囃　佐藤秀雄
能　蟬丸　海田トシ子　高安滋郎
囃　山根千代子
狂　箕被　佐藤卯三郎　井上松次郎
囃　野村又三郎

十一月三日　九皐会

能　遊行柳　中村つゆ　高安滋郎
囃　佐藤秀雄
能　班女　涛野静子　高安滋郎
囃　井上松次郎
能　鉄輪　植村真太郎　西村欽也
囃　佐藤卯三郎
狂　痩松　大野弘之　井上祐一

十一月十日　狂言和泉会　午後一時

十一月十七日　観世会

能　善知鳥　観世喜之　高安滋郎
囃　佐藤友彦
能　三輪　梅若六郎　西村欽也
囃　井上祐一
能　安達原　山本博之　高安滋郎
囃　佐藤卯三郎
狂　伯母ケ酒　佐藤卯三郎　井上松次郎

花甚

直売店　前駅豊田ビル一階　TEL㊺4587
名古屋駅表玄関　TEL㊺9078

温室　千種区猪高町西一社　TEL⑩0025

東新町電停東　CBC放送局西隣
TEL㉔0487・5296

狂言

昭和38年11月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5/2
井上重兵衛方　電㊟1430
名古屋狂言共同社
印刷所
株式会社　地上社　電㊟1196

狂言人語

共同社

芸術の秋は大塚清風社の記念能に明け中部金春会、中日名人狂言会、橋岡先生芸術院会員授賞記念能、名匠鑑賞能と盛り沢山に開催された。

狂言の名人を一堂に集めた中日名人会は愛知県文化講堂へ延二千有余の観衆を集めて芸の粋を競つて大変な好評であつた今更乍ら名人芸の偉力をまざまざ見せられたし、演ぜられた異色の顔合せには種々教えられるものもあつた。

来月は和泉会の開演を迎えます。青年宗家保之氏の熱の入れ方は必らずや皆様に御満足頂けるものがあると存じます。奮つて御鑑賞下さい。

十一月の催能

十一月三日　九皐会　午前十時始

能　遊行柳　中村つゆ　高安滋郎
間　佐藤秀雄
能　班女　浅野静子　高安滋郎
間　井上松次郎
能　金輪　植村真太郎　西村欽也
間　井上松次郎
狂　腹松　佐藤秀雄　井上祐一

十一月九日　一謡会　午前九時始

能　屋島　河村鉦二　西村欽也
間　佐藤秀雄
能　蟬丸　海田トシ子　高安滋郎
山根千代子
間　佐藤卯三郎
狂　箕被　野村又三郎　井上松次郎

十一月十日　竜神会　於岡崎随念寺

十一月十日午後一時始
熱田神宮　能楽殿

名古屋市民芸祭参加

第三回　和泉会

苞山伏　井上礼之助　野村又三郎　佐藤友彦
貰聟　河村丘造　佐藤秀雄　井上祐一
小舞　七ッ子　和泉保之
宗論　佐藤卯三郎　井上松次郎　山本光次郎
素囃子　絃上　内藤泰二
河村総一郎　田鍋惣太郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛　近藤源十
地謡　小沢喜一　竹腰勝一　戸田秀雄　鬼頭嘉男　吉田俊彦
鬮罪人　和泉保之　野村又三郎　三宅藤九郎　井上松次郎　佐藤秀雄　井上礼之助　大野弘之　井上祐一

主催　名古屋和泉会　狂言共同社

能　舟弁慶　都築岩田　高安滋郎
間　幸子　丹羽鉦治
十一月十日　和泉狂言会　午後一時
十一月十六日　みろく会
能　井筒　大槻文蔵　粉河幹夫
融　梅若盛義　植田隆之亮
間　木村正雄
狂　佐渡狐　茂山七五三　木村正雄
茂山孝夫
十一月十七日　観世会　正午始
能　善知島　観世喜之　高安滋郎
間　佐藤友彦
能　三輪　梅若六郎　西村欽也
間　井上祐一
能　安達原　山本博之　高安滋郎
間　佐藤卯三郎
狂　伯母ヶ酒　佐藤卯三郎　井上松次郎
十一月廿三日　芥川観瀬会　素謡会九時
十一月廿四日　掬水会
能　半蔀　森幸子　高安滋郎
間　佐藤秀雄
能　舟弁慶　谷野博　西村欽也
鷹羽早苗
間　井上松次郎
狂　成り上り　河村丘造　佐藤友彦
山本光次郎

狂言解説

箕被＝連歌にこつて生計を省りみない夫に愛想をつかして家を出ようとする女房、別れのしるしにともらつた箕をかついで立出るその風流な姿に「三日月の出づるも惜しき名残り哉」と呼びかける夫。「秋の形見にくれて行く空」とつけた女房、無理解なと計り思つていた女房の此連歌つけに男は妻にわびて、目出度く納まる元のさや。

瘦松＝腰抜けの山賊、女をおどして包を奪つたが長刀を置いて包の中を調べている内に女に長刀をとられ散々なぶられる。瘦松とはとりめのない盗みの事を云ふ。

和泉会は番組参照下さい

伯母ヶ酒＝大酒のみの甥。伯母宅の酒をのもうと種々苦心の末。鬼に化けてまんまと酒を飲んだものの、酔いつぶれてついに伯母に追込まれる。

成り上り＝北野のお手洗の夜。参籠する主の太刀を預つて寝込んだ太郎冠者はスッパに太刀を青竹にすりかえられる。さてその申訳に、太刀が青竹に成り上つたとは。

能にある物狂ひ

西村弘敬

能の四番目物には色々の物狂ひが取入れられて居るが、大体の筋の上では、子を失つた母親が我子を尋ねて家を狂ひ出て旅を廻るというものが多い。桜川、三井寺、角田川、等皆然りである。又男性では高野物狂や土車の様に主君の幼児を尋ねたり、或は幼主を伴つて父を尋ね廻るなど特種の物とあるが、男性の物狂ひは至極少い様である。物狂ひの曲は現行曲の内では百万、桜川、角田川、三井寺、柏崎、蟬丸、花筐、班女、高野、物狂、土車等で、古曲には鞠物狂、丹後物狂、由良物狂、松浦物狂、加茂物狂などがある。

扨そこで之れ等の物狂ひというのは

一般世間でいう気違い、即ち医学でいふ精神分裂症であろうか、どうにも合点の行かぬ事が多い。勿論此分裂症にも其程度の強弱やら種類容体と雑多であるが、能に出てくる物狂ひというのは何か之れとは少し違う様に思えてならない、と云うのは精神分裂症の人は、言う事為す事が随分常識とはかけ違つた事が多く、時には甚だしい粗暴な者もあつたり誠に困る事の多い病人であるが、能の物狂ひには、語る事或は振舞う事など殆んど間違いたる事もなく、所謂発狂人ではなく狂人を装う（よそおう）似非（えせ）狂人ではなかろうかと思えるのである。これは次の様な理由からである。

旅行をするには、現今では自動車、電車、汽車等さては飛行機などと便利で早い乗物が色々とあり、又警察力も充実した世の中であるのにこれでも婦人の独り旅（ひとりたび）などには、時には不安な出来事が生づる虞もないと言えない。昔の旅の道中には乗物といえば籠（かご）ぐらい大低の人は皆徒歩でぼつぼつ歩いて行つたものだ。従つて昔の道中には胡麻の蠅（ごまのはい）などという不良の輩や山賊夜盗の類が、我物顔に道中をおびやかして居たので、善良の旅人は大変苦労をしたもので、況んや女子の一人旅などは普通には不可能に近かつたと思われる。角田川のシテは京都から東京の隅田川の東岸沿、又桜川のシテは九州日向の国から常陸の国筑波山の西麓桜川迄と女一人で来た事などを考えると、よくよく苦労難義も多く有つた事と思われるが、これ等の困難を逃れる手段として、気違いの真似をし出鱈目な事を口走り、突拍子もない所業などして人目を誤間化して辛くも旅を続けたのだろうと想像されるが、斯様にでもしなければ到底此の長旅が出来る筈はなく、即ち子を失つた悲歎から幾分物狂はしくなつた人が、道中の安全を守る方便として狂人の真似をして旅をしたのではないかと考えられるがどうでしようか。

狂言往来

野村広二

今年も秋の演能シーズンを迎えた。演能では、十月の「大原御幸」（金巖剛）と「大江山」（豊島弥左衛門）がおもしろかつた。またきけば、金沢の世阿弥記念北陸中日能の「実盛」（近藤乾三）は実にすばらしかつたと京都の知人からたよりしてきた。待望の中日狂言会は、和泉流は万蔵と藤九郎の個人芸、もちろん相手役との芸の投射はあるが、「悪太郎」（万蔵）の豪快「花子」（藤九郎）の格調で目を大いに楽しませ、一方、大蔵流は群の芸で、見所を圧倒した。「武悪」（千五郎ほか）の後半と、「靱猛」（どちらも弥五郎、山本東次郎ほか）は狂言のよさを余すところなく演じおわせたといえよう、武悪の冷え冷えとした美しさと、あの弥五郎翁の味わいつくせない深い味と東次郎のきりりとしてしかもやわらかい芸の立会いは見事。この会見物のただ一つの眼目である弥五郎翁と東次郎の二人がうまくとけあつていたのが成功といえよう。ただ七時半頃から後方の席が次第次第にまばらになつていくのが寂しかつた。「世阿弥」では、「文芸」一〇月号に「世阿弥」（山崎正和）が巻頭を飾り、「金春」（第一七号）には「世阿弥に関する新資料の発見」（金春欣三）、「恋の重荷管見」（金春信高）とちぎぢき兄弟で本の重みをつけているのはうれしい。「文学」（一〇月号）は「世阿弥生誕は貞治三年か」（表章）で明年が満六〇〇年ではないかと考証される。それにつけても、昭和一七年に、世阿弥（歿後）五〇〇年祭記念行事がおこなわれた。そのとき、今は亡き小林静雄氏が、もつとも同氏は貞治二年生れの嘉吉三年歿を定説とされ、数え年ですれば、一七年、満ですれば明年（一八年）と発表された（謡曲界、一七年一一月号）。思いあわせるといろいろ想念がわく。そして名著「世阿弥」は満五〇〇年の一八年に出版された。ほかに「国語国文」（京大、三四九号）の「狂言の主従—武悪」（佐竹昭広）も目をひく。さて徳川美術館の「能装束」（上下二巻）ができ上つた。まだみていないが、眼福の栄にあづかる日のまちどおしいこの秋である。

十二月の予告

十二月一日乱能　十二月七日巽会　十二月八日宝生会　十二月十五日壺泉会　十二月二十二日霞会

一月の予告

一月五日学生能　一月十二日故片岡信二追善能　一月十五日大槻十三師追善能　一月十五日宝生会　一月十八日喜友会

何と云つても
お茶は井半
創業天保十年
井半茶店
名古屋・伏見町

狂言

昭和39年1月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5ノ2
井上重兵衛方　電㊟1430
名古屋狂言共同社
印刷所
株式会社　地上社　電㊟1196

狂言人語

共同社

一九六四年の辰の春を迎えてまづまづあけましてお目出度うございます。種々の不幸なニュースや重苦しい事件があつた一九六三年を送つて一路昇天昇竜の輝かしい新春です。オリンピックの開かれる年、私達も今年こそ芸事達成に努力精進する覚悟でおります此小誌も六十七号を迎えました。是非の論もありましたが一年十部発行、七年間を送り長い年月でした。其間には幾度か発行が重荷になつてやめようかと相談した時もあり、又柱と頼む歌村彦四郎氏を失つて出版の意欲を失つた時もありましたが、皆様の御支持と御鞭撻によつてからくも迎えました八年目です。愈使命の重さを感じますが極力微力をつくして狂言界の為にささやかな布右として尽力する覚悟をかためました。何卒今後共よろしく御支援下さい。

頌春

昭和三十九年元旦

名古屋狂言共同社
和泉会
同人一同

一月の催能

一月五日　学生能と狂言の会

能　加茂　服部恭子　橋本和哥子　船橋桂子　荒井和子
能　小督　三輪雅代　千葉菁子　田中京子　内田亜子
狂　口真似　寺尾忠正　沓名宗春　丹羽鉦治
狂　竹の子　伊倉日出一　長谷川元　森富太郎

一月十二日　片岡信一師追善能

能　自然居士　豊島弥左衛門　高安滋郎
間　佐藤卯三郎

一月十五日　大槻十三師追善能

能　江口　金剛　巌　豊嶋　十郎
能　郎　鄙　井上松次郎
間　片岡　道子　高安　滋郎
間　佐藤　秀雄
河村　丘造
井上礼之助
井上　祐一
狂　仁王　和泉　保之
佐藤　友彦
今枝　良治
大野　弘之
井上松次郎
能　羽衣　杉浦　重次　西村　欽也

能　砧　大谷一三務　高安　滋郎
間　井上松次郎
能　舟弁慶　長屋　潤　高安　滋郎
間　佐藤卯三郎
狂　呂蓮　佐藤　秀雄　佐藤　友彦
井上　祐一

一月十九日　幸友会　囃子会

一月廿六日　宝生会

能　高砂　内藤　泰二
間　佐藤卯三郎
能　竹雪　宝生九郎
間　井上松次郎　佐藤　秀雄
井上　祐一　河村　丘造
狂　餅酒　佐藤　友彦

狂言解説

仁王＝例の手なぐさみで一文無しになつた男、友達に智慧をつけられて仁王が降つた事にして仁王になりすまして供え物を取つてすかそうとしたが、ドッコイ、いざりにさすられて、化の皮をはがされる。

呂蓮＝　旅の僧、一夜の宿を頼んだ家の主人から懇望されて、弟子として頭をそつたものの、命名を頼まれて文盲同然の身ではたと困り、いろはの手本からヤット名をつけたが、坊主嫌いの女房に散々毒づかれ追込まれる。

餅酒＝　加賀と越後の百姓年越しに餅と酒を御年貢に納める為都へ上る。目出度いお祝に一首の歌をと所望されて読んだ歌は。

竜の年の能

西村弘敬

芽出度昭和第三十九の新春を迎えまして御同慶の至りに存じます。本年は干支（えと）の上では辰の年で、此辰（たつ）という文字は「日」とか「星」とかをさすにも用いられるが、「たつ」は又「立つ」「建つ」などに通ずる音で、何となく縁起の良い感じがする。此辰の字の代りに「竜」の文字が用いられて居て、今では此の方が本物の様に通用して居る様に思われる。さて此竜とはどんなものかというと、これは想像で拵へた仮想動物であるらしく、よく絵にある様に大蛇に角（つの）や鬚（ひげ）などが生へ手足がつきとても「グロテスク」な物凄い形のもので、京都嵐山の天竜寺の法堂の天井一パイに書かれてある竜は有名で、故松年画伯の筆とか聞いて居る。竜は昔から色々の事に使われて居て、謡や能にも良く出て来る。即ち「竜神」「竜宮」「竜王」「竜女」などの文字のある謡には、「竹生島」「張良」「一角仙人」「海人」「弦上」「三井寺」「春日竜神」など沢山あるが、中にも「春日竜神」は其代表的なものであろう。此春日竜神の能には中入後に八大竜王の名が出て来る。八大竜王とは「ナンダ」「バツナンダ」「シャカラ」「ワシユキツ」「トクシャカ」「アナバダツク」「マナス」「ウバラ」の八種類の竜王で、謡には前の方の六種の竜王だけ挙げてある。又此春日竜神の能には特に面白い小書の替り演出があつて、竜神揃（りうじんぞろい）というのがある。これは後シテの竜神が大勢出るもので、竜王七人竜女二人で各々の竜神が自己の名を謡い名乗りなが

ら順々に幕から出て来て、舞台橋懸り一パイなつて舞うという誠に賑やかなものであるが、何分にも面装束小道具類が大量に揃わなければ出来ないので一寸簡単に見る事が出来ないのは残念の次第である。又此春日竜神の能に狂言方の替り間語りがある。町積り（ちようづもり）というて、釈尊が説法を為された天竺（てんじく）即ち今の印度迄仏跡を拝みに行くのにどれ程の道のりがあるかと、其寸法を色々と論議するという変つた間語りである。今年は「たつ」の年に因んで東西どこかで此竜神揃が上演されないものかと期待して居る。

狂言往来

野村広二

新年おめでとうございます。まずは同好の方みなみなさまのご多幸をお祈りしたいと存じます。次には、今年で八年目を迎えたこの「狂言」、名古屋の能楽界と歩みをともにするこの小誌がいつまでも愛読されるよう、お願いしたいとおもいます。

毎年のことながら、昨年の能楽とその周辺をかえりみましよう。第一に、青年の活躍が年一年と充実していくのは楽しいことです。また藤田昭彦少年の「鷺」も、鷺が金剛永謹（ひさのり）、太鼓は前川光長両少年の共演で、能楽万才を唱えさせるような、いつまでも忘れられない舞台であつた。しかし長老の側では、小鼓田鍋憨太郎氏の病臥と全快、ワキ西村弘敬氏の引退、狂言歌村彦四郎氏の他界と、おもわぬ不安とさみしさにかられました。美術評論家脇本楽之軒、久保田万太郎、コクトー、オルダス・ハックスリー、そのほか諸学者の永眠にまじり、橋岡久太郎、松野奏風、片山博通三氏が鬼籍に入られたのも、かぎりない痛恨事でした。新春に当り、あらためて冥福をお祈りしたい。さて、地元勢の演能では、狂言は「六地蔵、馬口労（ばくろう）、祐善（井上松次郎と野村又三郎の二番）、宗論、鐘の音」がよかつたし、能は内藤泰二の「羽衣」と片岡道子の「舟弁慶」が印象にのこりました。

狂言の会は朝日狂言会、和泉会、やるまい会に中日狂言会がおこなわれ、狂言のよさをゆたかにみせてくれました。「悪太郎」（万蔵と忠一郎の二番）、「花子」（藤九郎）に「栗焼」（茂山弥五郎、これからは善竹弥五郎と改姓）「覆猿」（弥五郎、東次郎）、「武悪」（千五郎）、「入間川」（倖一）は思い出の数番でした。能の方はノートからひろうと、昨年も多彩。「実盛、山姥」（鉄之亟）、「花筐」（六郎）、「舟弁慶」（猶義）、「景清」（喜之）「石橋」（喜之、大槻文蔵）の観世に金春の「乱」（本田秀男、金春信高）、金剛の「芦刈、海人、大江山」（豊島弥工衛門）、「大原御幸」（金剛巌）と喜多の「実盛」（後藤得三）であつたが、宝生は、せわしないあらい「俊寛」（九郎）一番だけだつたのは残念です（「熊野」（英雄）未見は「三輪」（六郎）「松風」（竜馬）を後日に期したのとあわせて昨年の空白は筆者にとつて大きいものでした）。テレビでは九郎の「翁」（CBC）と「三番叟」（東次郎）「覆猿」（万蔵、NHK）それに「土蜘蛛」（巌）「敦盛」（元昭）「卒都婆小町」（六郎、NHK）がすぐれ、「世阿弥」もラジオ（NHK）で放送されました。あの「卒都婆」は東西演劇シンポジウムで来日者にみせられたもの。そこでは、能（能、狂言）にあらためて敬意が払われた由。「能は象徴的で前衛的」。こんなことばが語れたようです。田中韵言展には、白蔵主の根じめや舞楽「陵王と還城楽」の画に古今著聞集の屏風が目をひき、千家十職展も能、狂言にちなんだ道具の展示で同好者をよろこばせたとおもいます。徳川美術館の能、狂言の「装束集」も見事でした。なお、名古屋だけでも多事で、にぎやかな三十八年でした。この頃、能をみていると、幽玄の味が以前とちがつているように感じます。どんな風に、なぜかは、はつきり申し上げられませんが、ぴしつと胸にこたえることがよくある。時代、演者、周辺といろいろの機縁がからまるのでしようが、能のモダニズム、または大きく変る曲り角か、放言とおおもいになる方はお許しください。しかしそんな気がつよくいたします。

活潑だつた世阿弥没六百年記念関係は、その伝記、文献、演出（台本）の三方面の新発表と大きな行事から、世界の「世阿弥」と、ますます声名をはせることになつたのはうれしいことです。十六部集発見、故野上、能勢両博士時代をへて現在まで、三代の目とよばれて、その集大成は、美と人間形成に大役を買うことでしよう。実に「展開」はこれからです。

名古屋の能界には、今年は、「脚下照顧」と「展望」の二点をお願いしたい。それには活生命がなければ無意義です。そして広がりと墨守です。右顧左べんと低迷はいけません。そこで、狂言と能が包蔵する美しさとよさを、個人の味わいをとおし、全体の総和から享受できるよう、年頭に、お願いしたいものです。そうです、今年も、一月から何かと期待がもてそうです。

和泉会についての報告

共同社学生部編

最近狂言などの観客層が非常に若くなつて来ているという現象は名古屋だけのものではあるまい。テレビ、映画など多くの娯楽機関が叛乱している現在において、狂言が単なる古典芸能として保護、伝承されていくのではなくあくまで大衆のものとして大衆の中に生き続けて行くためにはこれらの若い観客層をつかんで行くことは非常に重大なことであろう。一体彼等は狂言に何を求め、どの様な態度で鑑賞しているのだろうか。ここに集めて見たのは

昨年十一月十日に開かれた狂言和泉会の際のアンケートである。数少ないものではあるが、今後の狂言界の方向にとつても有意義な何物かがあるだろう尚、項目順の問は次の通りである。

一、狂言はよくごらんになりますか。又、今後もごらんになりたいですか。

二、ごらんになつて総体的に面白かつたか、つまらなかつたか。三、当日の催物（苞山伏、貰聟、宗論、瓜盗人、千鳥）内、特に面白かつたもの、或いはつまらなかつたもの。四、狂言小舞（七ッ子）及び舞囃子（弦上）に関して感じたこと。五、それぞれの狂言に付てどんな点に気付き、面白くまたつまらなく感ぜられたか。六、その他、まず一の問に関しては殆どの人が初めて、或いはせいぜい三回目位としか答えておらず、必ずしも若い固定層をつかむに至つてはいないことを示している。又、二の問に関しては殆んどの人が面白かつた、或いはまあ面白かつたと答えている。

（例一）　十九才、学生（女）
楽しかつた。ウイットに豊富だ。会話のやりとり、タイミングの良さ、舞や歩き方に見られる身の運びの美しさ、等々。珍しさも手伝つて大変面白かつたです。

（例二）　十八才、学生（女）
まあ面白かつた。笑いもあり、話の内容も別に難しくなく、初めてのものにもよく解り見て良かつたと思いました。

次に四、三と問五に関しては非常に面白い結果が現われた様である。

（例一）　十九才、学生（女）
瓜盗人――面白かつた。擬音等を言葉で表現するのが珍しく感ぜられた。千鳥――余り面白くなかつた。チリチリ……と何度も繰り返し、少しくどいと思つた。
貰聟――人間の心理（特に夫婦の間の心理）普遍的だと思つた。

（例二）　十九才、学生（女）
全部面白く観せて頂きましたけれど千鳥に於て〃酒〃をめぐつての二人のやりとりは繰り返しが多く、少し重い感じがしました。貰聟の会話、親子の関係、夫婦の関係等、特に面白く思いました。
狂言に用いられている題材が日常生活の手近な処から取り上げられているということに驚きました。

（例三）　十八才、学生（女）
面白かつたもの（貰聟）つまらなかつたもの（千鳥）。
食べる場面とか酔つてよろめく所など本当に食べたり酔つたりしている様で見とれました。それから足の運び方や歩き方も全部同じでなく、それぞれ異つている点にも。
女の登場人物はやはり女だつたらと（これは無理でしようが）、貰聟の話は現在においてもこれと何ら変らない事が起つていて、いつの時代もよく似ていると思いました。

（例四）　二十一才、学生（男）
特に面白かつたもの――宗論、作者の論点が最も明確であつたと思う。他の作品に比して面白さが今一つ芸術的な領域にまで高められている。
つまらなかつたもの――苞山伏、ストーリーの単調さ、不明確さ、演技者の熱演にもかかわらず面白くなかつた。
貰聟――単純なドタバタ喜劇的なホームコメディーの感がした。千鳥――演技者の熱演に感心。

（例五）　二十才学生（男）
宗論――狂言らしい大らかな、素朴な民衆意識が端的に表現されていて最も面白かつた。当時の仏教の隆盛時代にあつてこれほど仏教を大らかな余裕をもつた態度で受け入れているのは、まさに狂言ならではであろう。貰聟・瓜盗人――別になし。千鳥――タイミングと躍動する演技はまさに狂言会のフィナーレらしい余韻をのこしてくれた。

以上の様に女性の殆んどが貰聟を最も面白いものとして取り上げているのは、（面白いものとして千鳥、宗論を挙げた女性が各一人）やはり、女性という立場から来るものでもあろうか。男性が宗論を高く評価し、貰聟をドタバタ家庭劇としてしか感じていないのとは全く面白い対象である。又、女性の多くは面白くないものの例として千鳥をあげているのも非常に興味深い現象であろう。次に(四)の問については殆んど全員が、興味なし、全然わからない、退屈だ。説明でもあつたら――、

賀正
ふごや
河文
電話代表㉓一三八一番
トヨダビル店
大名古屋ビル店
くせな
船津屋
電話桑名代表一八八〇番

等と云う解答が集つている。

(ハ)のその他という項には色々な問題が提起されている様だ。

(例一)　二十一才、学生(男)

狂言が現代という時代に演じられるということにいかなる芸術的値価が存在するのだろうか。狂言を単に古典としてのみ扱うのなら、それは文化の伝承という意味でしかない。もしそうであるとするならば何らかの保護段手を構じないことには必然的に消滅するであろう。狂言が現代にも立派に芸術としての地位を維持するものであり、又演技者自らが希望するのであれば、果して狂言は今のままでよいかと思わざるを得ない。そこで云う笑いにしても(例えそれが現代に生きる我々に迫るものとしても)現在では他の芸術部分で立派に活躍しているものであり、ことさら時代感覚のずれた狂言から感じ取らなくてもすむものである。狂言を古典として伝え、又芸術として鑑賞したいと願う我々は狂言でなければ表わせ得ないもの、古典でなくては表わせ得ない雰囲気、そういうものをさらに明確な形で追求すべきではなかろうか

(例二)　十八才、学生(女)

この様な特殊な芸術は余り知る人が少ないと思います。私自身名古屋にこんな会があるとは知りませんでした。名古屋にもこんな立派なものがあると云う事をもつと多くの人が知ることが出来たら、と——。

(例三)　十九才、学生(女)

歌舞伎の様な華やかなつやつぽさはないけれど、素朴なそして厳かな美しさを感じさせてくれました。……。まずは和泉会も成功だつた様である。

(文責佐藤友彦)

二月ノ予告

二月二日　宝生嘱託会

二月九日　梅若独演会
能　鉢木　梅若猶義
能　羽衣　梅若猶義
能　安達原　梅若猶義

二月十六日　観世会
能　巴　武田太加志
能　雲林院　観世元正
能　鞍馬天狗　観世喜之
狂　入間川　佐藤卯三郎　井上祐一
佐藤友彦　井上松次郎

二月廿三日　たなびき会

お披きのおしらせ

楽師協議会

山根千代子　能蟬丸披　河村社中
海田トシ子　能蟬丸披　河村社中
竹下みき　囃子披　辰己社中
田中政子　囃子披　辰己社中

編集後記

西村弘敬先生からお正月に最適の辰の年の能と云う玉稿をいただきました。毎月々々玉稿を頂き種々と御意見を頂きまして、誠に有難く誌上を借りまして厚く御礼申上げます。

×××

前回の和泉会狂言に関して名大金城大の学生諸氏からよせられたアンケートの集録を特輯してみました。

年新賀謹

一謡会　河村鉦二
石井会　西尾孫太郎
藤門会　加藤良久
長生会　鬼頭八郎
中部金春会　前田昌広
竜吟会　藤田六郎兵衛
観衛会
霞会　田鍋惣太郎
潤水会　林甲子男
観水会　野崎太郎
観正会　久田秀雄
春星会　片岡道子
高安会　高安滋郎
たなびき会　田鍋惣一郎
名古屋能楽鑑賞会　田鍋惣太郎
名古屋能楽倶楽部　植村真太郎
風韻会　殿島修二
幸友会　福井啓次郎
金剛流松風社　片野東四郎
掬水会　柴田初太郎
曲水会　増田一雄
金竜会　金森準三
春鶯会　山田仁三郎
正楽会　加藤丈太郎
松謡会　佐藤太俊
清風社　大塚一二
掬水青陽会
能楽協会　名古屋支部　支部長　田鍋惣太郎
名古屋和泉会　会長　徳川義親
狂言共同社　(イロハ順)